
魅月町・懐古の雪

徳山 ノガタ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魅月町・懐古の雪

【NZコード】

N5145D

【作者名】

徳山 ノガタ

【あらすじ】

現在から遡ること5年。元・不良の少年と天真爛漫な少女、そして奇妙な老人の出会いによって明かされる、魅月町の秘密とは……？ “町”自身が語る現代ドラマシリーズ・その5

プロローグ・語りられるべき神話

ふうむ……とつとづく、この物語を紐解く時が来たよつだ。今までずっと胸に秘めてきた、このストーリーを。

おつと、あこせつが遅れてすまない。魅月町だ。今日初めて会つ人もいるかもしねりが、私自身の紹介は省いておこう。

私がこれまで語ってきた4つの物語　これらは皆、ほぼ同じ時間軸に起つた出来事だ。しかし、今回お話しするものは違う。今回ストーリーは、現在から5年ほど遡つた時代の話だ。

そしてもう一つ、言つておかなければならぬことがある。これまでの物語は、全てこの私自身が見聞きしたものだ。“町”としての権限を使ってな。だが、これから紹介する物語には”直接私自身が見ていない、あるいは聞いていない場面”も登場する。それらの場面は、後に入々の話を聞いたり私自身が推測したりして補完している。

……………どうこうことだ？　なぜ町自身が見聞きしていないのだ？
と、お思いになるだろ？　その謎は、きっとどこかで明かされる。

この物語は、これまでの物語にも通じる非常に重要な物語だ。

タイトルは　【懷古の雪】
かごいのゆき

さあ、じ覽あれ！

第1章・嘲笑

「ライトオー！　いつたぞーーー！」

威勢のいい掛け声とともに白球が飛ぶ。リリは町前の公園隣にあ
るグラウンド。学校帰りの高校生たちが野球に興じてこる。当時、
この魅丹町には大した娯楽施設がなく、暇を持て余した若者が球技
に熱中することも珍しくない。

「よおし、追いついた」

高く舞い上がった打球が、ゆっくりと弧を描いてライトのグラブ
に収ま……しなかった。ヒラーだ。それをみたランナーが一斉に走
り出す。

（おこおこ……こゝ加減にしきよ。アイツ一人で合計4回田のヒル
ー。これでもう五差だぞ？）

わつと思つてこるのは、ピッチャーをしてこる男子だ。わざと周り
に聞こえるように舌打ちをし、マウンドを強く蹴りつけている様子
を見ると、かなりイライラしてこるようだ。

（あのライト……誰だよ、あんなヤツをチームに誘つたのは。ウザ
え……）

肩まで伸ばした長めの茶髪、鋭く、やや吊り上がった目、一見し
て「不良」を思わせるこの少年が、この物語の主人公、夜季よすである。
姓はまだ伏せておく。

夜季はグラブを投げ捨て、ベンチのほうへ歩き出す。驚いたチームメイトの男子が声をかける。

「お、おこロキ！ ビビ行くんだよ… まだ途中だろー…？」

振り返りもせずに、夜季は答える。

「帰る。あんな”負けたがり野郎”がいたんじゃおもしろくねえし、たかが暇つぶしで余計なストレス感じたくないねえからな。… そろそろ、野球にもあきたし」

Hマークした男子 体格はいいが、どうにも気弱な印象だが何度も頭を下げるが、夜季はそのままワイシャツとカバンを取つてグランドを出て行つた。

(つたぐ、鈍くせえ奴……高校生か？ あいつ、本当にあお)

「お前さんが打たれんけりやいのこのつ
ぶつぶつと文句を言いながら、夜季は近くの自販機にコインを入れる。すると…

「お前さんが打たれんけりやいのこのつ

と、声が聞こえた。

「？ ……誰だ…？」

「コインを入れたまま、自販機から離れて声の主を探す。しかし、周囲に人影は見られない。

もう一度自販機のほうを振り返ると、いた。

ヨレヨレの和服を身に纏つた白髪の老人が、いつの間にかそこに立っていた。そして、すっと手を伸ばし、自販機のスイッチを押す。

ピッ、ガシャン。

「あ、おい！ それはオレの金……」

「ん？ なんだ、離れていくからもういらんのかと思ったわ」

老人は悪びれる様子を見せらず、逆に人の神経を逆なでるようなニヤニヤとした笑みを浮かべている。奇妙な老人だ。どこから見ても60を過ぎた老人なのだが、全身から若々しい空気を放っている。

「そうそう、野球の話だつたな。エラーが多いと感じたら、その分野手にプレッシャーを与えるよつな気遣いがいるだろう。第一、ピッチングで三振に抑えれば何も問題はない」

老人は淡々と言葉を続ける。

(あ……？ なに言つてやがんだ？ ヨイツ……)

突然現れたわけのわからない人物にいきなり説教されて、夜季はますます苛立つてきた。

「『チヤチヤ』とうるせえんだよ！ ケンカ売つてやがんのか！？」

夜季は老人の胸倉を掴み、思い切り怒鳴りつける。しかし、老人は少しも動じず、なおも口を動かす。

「肝心なのはミスそのものではなく、そのミスを放置しどったことだ。キチツと対処していれば、一度や一度のミスなど……どうどこう」とはない

言つていることが正論なだけに、余計に腹が立つ。夜季の堪忍袋の緒が切れた。

「黙れつ！ このクソジジイ！」

空いていた方の拳を固め、老人の顔面目がけて殴りつける。が、うめき声を挙げたのは夜季の方だった。

「… つてつ…… 一 痛……」

老人はスルリと拳を交わし、逆に夜季のみぞおちに一撃を入れていた。

「年寄りに暴力を振るつなや。まつたく、最近の若いもんはマナーがなつとらんのよ」

そう言い捨てて、老人はスタスタと歩き去つて行く。

「ま、待ちやがれ！」

夜季は叫ぶが、腹部に走る痛みのせいで追いかけることが出来ない。

「ま……もちに一つと冷静にならにゃあいかんな。それはくれでやる」

老人はそのまま公園を出て行つた。しばらくしゃがみこんでいた夜季はようやく立ち上がり、自販機の取り出し口に手を入れる。

「『それ』ってさつきあのジジイが買つたやつか？　くれるもなにも、元々は俺の金だつ一つの……って、なんだこれー？」

夜季が取り出したもの。それは一目で子ビも向け、と分かる牛の絵がプリントされた牛乳のビンだった。

「ふざけんじゃねーぞ！ ジジイー！」

せいぜいカルシウムでも摂るんだな。クツクツクツク

そんな声が聞こえたような気がして、夜季は再び怒りに震えた。

第2章・少女と一人の優等生

翌日。県立鶴鳩高校・三年A組の教室にて。

時刻は十一時半。受験に向けて教師の話に集中する生徒が多数の中、夜季は堂々と居眠りをしていた。夜季は高校卒業後は実家の商売を手伝うことになつており、受験はしない。誰にも邪魔されず、机に顔を伏して呑気に夢を見ていた。しかし、その夢はあまり良い夢ではなかつた……。

夜季の夢の中　昨日の老人が、ミルクを持つて迫つてくる。

『ほりほり、坊や？　ミルクの時間だぞ？』

夜季は逃げようとするが、足がうまく動かせない。夢の中の夜季は、赤ん坊の姿になつていた。老人がすぐ目の前にまで迫つて来る。

『や、やめろ…………やめろよ！　来るなつ来るなー！　やめろやめろやめろ…………』

「やめろよー！」

自分の声で目を覚ました夜季は、自分が突然起き上がりて周囲の注目を浴びてこむことに気づいた。

「あーその、君ねえ。授業中に……」

今年転勤してきたばかりの中年教師が嫌味たらしく声をかけてくる。夜季がきまり悪くなり、

「…………わかったよ。出でいきやこいんだらうが」

と言ひ出した瞬間

「「あんなさい！ 木崎先生！」

夜季のすぐ目の前の席の少女が、大きな声を上げた。

この少女がこの物語のヒロイン 朝浦雛子である。雛子は、ある外見的特徴のせいで非常に目立つ存在だった。

それは、『生まれつき髪が白い』という事。

病気ではなく、ただ色が白いというだけである。雛子曰く、祖父の遺伝ということらしい。持ち前の明るく前向きな性格のおかげで、クラス内では特に嫌われているわけではないが、やはり近付き違い存在になってしまっている。

その雛子が立ち上がり、教師に深々と頭を下げる。

「ええと、その、授業中に早弁、じゃなくて早飲み？ は違うなあ……早……ドリンク？ をしてたのは悪いことだと分かつてます。けど、今日は残暑が厳しくて蒸し暑いし、喉が乾いちやうと授業に集中できないから……」

「…………いや、朝浦君……」

中年教師があつ氣に取られている。周りの生徒もクスクスと笑いだした。

(「こいつ……もしかして自分が叱られたと思つてんのか？　つてか、すぐ後ろの俺に全く気付いてねえのかよ……）

夜季が拍子抜けていると、ようやく雛子も気が付いたのか、キヨロキヨロとあたりを見回して後ろを向き、同じく立っていた夜季と目が合ひづ。

「…………あつ…………」

三年間同じ学校にいながら、夜季は雛子の顔をちゃんと見たことがない。いや、夜季に限らず、大半の生徒は白髪を意識して、あまり雛子の顔を見ないようにしているのだ。

(「こいつ……結構整つた顔立ちしてんな…………）

一瞬、夜季がそう思つた時、教師が口を挟んだ。

「えー…………もうわかつたから、授業を続けてもいいかな？」

「あ、ハイ。すみません、先生」

雛子がもう一度頭を下げて席に着く。

(…………ま、「イツの天然のおかげで恥が軽減したな

夜季も座りかけたが、ふと気になつて雛子の机の上を見た。そこにはつたのは、飲みかけの……あの子供向けのミルク瓶だった。

(いい加減にしそおおおおつー)

今度は口には出せなかつた。が、代わりに夜季自身が教室を飛び出していく。

「うつかり条件反射で逃げけまつた……。やしまでトライアマコなつてんのか?」

教室を飛び出した夜季は、生徒会室の長机の上に寝そべつてブツブツとつぶやいていた。この学校の校風は一言で言つと「ゆるい」。大概のクラブ活動や委員会は生徒の自主性に任せられており、かぎの管理も甘い。

特に生徒会に至つては、学校一有名な不良生徒が会長になつており、しかもその本人は現在障害事件で停学中である。そのためこの生徒会室はほぼ出入り自由の状態になつてあり、夜季はいつも昼休みをこじれすりすりにしている。

「なんでよつこよつて牛乳なんか飲んでるんだよ……あいつは」

なおもつぶやいていると、授業終了のチャイムが鳴つた。同時に、廊下を歩く生徒達の声が聞こえてくる。

「やつと終わつたか

夜季が体を起こすと、ドアが開いて一人の男子生徒が入ってきた。

「あれ、ヨキ早いね。またサボったの？」

そう言つたのは、生徒会・「副」会長の西条 凜である。

メガネをかけ、眼鼻のすつきりとした顔立ち。瑞々しい白肌。一つに束ねて腰まで伸ばした漆黒の後ろ髪……男子の制服を着ていなければ、女性のようにも見える。（実際に、よく女の子に間違えられる）。その丁寧な物腰と中性的な外見が女子からの高い人気を呼び、FJまであるといつ。

「一応、途中までは授業出てたぞ」

「ハハハ。最後までちゃんと聞かなきや」

女性がため息をついて憧れるほど艶のある髪をなびかせ、凛は空いている席に着く。そしてもう一人、凛と一緒に入ってきたのだが先ほどのから一言もしゃべらない男子がいる。

「ユーシ、ドア閉めてくれる？」

ユーシ、と呼ばれたこの無表情な少年が、伊波 タ紫である。無表情に加えて無口・無愛想と三拍子を兼ねた物静かな男だ。しかししながら、試験を受けさせればあらゆる科目でトップとなる高い頭脳の持ち主でもあった。

夜季、凛、タ紫。この3人はあるきっかけで仲良くなり、昼休みにはこの生徒会室に集まるようにしている。

「ユーシ……？　おい、どうしたんだ？」

ドアを開け放したまま廊下の奥を見つめる夕紫に、夜季が声をかける。夕紫は、目線を固定したまま薄く口を開く。

「……朝浦スー」「……」

「え？」

凛が聞き返すや否や、バタバタと走ってくる足音が廊下の奥から響き、見間違えようのない白い頭が飛び込んできた。

「み、み、み、見つけたあ！」

息を切らし、顔を上氣させる雛子が夜季を見据える。

「な、なんだよ、お前……なんか用か？」

「ハア、ハア、も、もちろん……用があるから来たのよ」

「この時の雛子の用件が、どんな意味を持っていたのか。夜季が真相を知るのは、ずっと後のことになるのであった……。

第3章・産声に集づ

「どうあえず、座つたら?」

凛が雛子に席を薦める。

「ありがと。えーと……副会長」

「で? 用件はなんなんだよ」

夜季は面倒くさそうに足を投げ出す。先ほどの件もあり、夜季はこの少女のことが苦手になっていた。

「ひとつずつせめてひとつ帰つてくれねーかな」

「なによ、Hランナー?」……聞ひやみ

オホン、と一つ咳払いをし、雛子は続けた。

「文化祭、あるでしょ。1~1月に」

「ああ、2か月後だな」

「で、あたし、文化祭で映画作つて発表しようと思つてんの」

「へえ」

「……で?」

凛は興味深々つい、夜季はびっくりでもみやがつて答える。

「だから……映画、作るの手伝つて？」

「断る」

即答。

「ううっと、エキ一 もつ少し話を聞いつけよ」

凛がたしなめるが、夜季は不愉快な表情を浮かべて離子に食つてかかる。

「なんでお前が映画を作りたいのかは知らないし、どうでもいい。問題のは、なんでオレがそんな下らねえことをしなきゃならねえのか、ってことだ」

「う……だつてえ……3年生のみんなは今から受験、受験つて忙しいじやんー とりあえず、ヒマそうな人から誘おうかなつて……」

「悪かったな。ヒマそう」

フン、と鼻を鳴らして向ぼ向ぐ。

「朝浦さん」

「ん？ なに？」

声をかけたのは凛だ。

「僕でよければ、手伝うけど」

「ホントー?」

「お、おいつ！ リン！？ お前も受験生だろ？ が」

驚いた夜季が聞き返す。

「勉強は時間をかけねばいいってものじゃないからね。それに、今年で高校生活最後なんだから、こういう行事は大切にしたいよ」

「さつすが副会長～。だよね？ 行事大切だよね！ なのにウチの学校、文化祭まで地味で詰まんないんだもん。あたし達の手で盛り上げなきゃ～！」

雛子は一ヶコリと笑みを浮かべて凛の手を握る。他の女子が見ていたら嫉妬されそうな光景だ。

「勝手にしゃがれってんだ」

夜季はますます不機嫌そうに顔を滲べする。

「ちなみに、なんで映画を作ろうって思ったの？」

凛がそう聞くと、雛子は少し考え込んだ。

「んー……ちょっと説明しづらいかな……ある人に会つてくれたらわかりやすいんだけど……」

「ある人？」

「ん。よかつたら、今田の放課後、会に来ててくれる？ みんなで」

「オレはやいねえつひとつあるだらうがー...」

夜季が雛子を睨んで怒鳴りつけた。

「僕はこことよ。コーシは？」

凛がわくと、夕紫は無言でうなずいた。

「三キ。話を聞くぐらにならへんじやないの？ 今日せ他に用事なこみね」

「おねがいっ！ 今日一緒に恥かいた仲じやんー！」

「いや、恥つて……」

夜季は反論したかつたが、凛と夕紫が行くとなつた手前、少々分が悪い。

「……話、聞くだけだからな」

「うふー… ジヤ、放課後ね。それと、あたしのことはスーパーで呼んで。フレンドリーにね」

(なにがフレンドリーだよ……馴れ馴れしい)

そして放課後。夜季・凜・夕紫の3人は雛子の後に続いて校門を出た。

「そう言えばヨキ。昨日の野球、どうだつた?」

「野球……オレ、途中で抜けたからなあ。気分が悪くなつて」

「……機嫌が、だろう」

ボソッと夕紫がツツ「ミミを入れる。夜季の性格を知つていれば、この程度の推理（？）は夕紫がにとつてた易い。

「まあ、ムカツク野郎が一人いてよ。……いや、一番ムカツくのはその後のジジイ……」

後半は独り言になつてゐる。

「えー? なに? 何の話?」

雛子が振り返つて話に入つてくれる。

「お前には関係ねーよ」

と、夜季は言い捨てたが、実は非常に関係があつたのである……。

20分程歩いたとき、目的の場所についた。

「ここ、あたしの家。ここのは2階にその人がいるから

住宅街から少し離れたところに、その家はあつた。雛子に続いて

夜季達はその中に入つて行く。

「近代的なリビングって感じだね。けつこう広いし」

凛が感想を言つと、雛子はいたずらっぽく笑う。

「一階はね。二階はスゴイ」とになつてゐるよ

階段を上ると、そこはまるで江戸時代の民家のよつだつた。黒ずんだ板張りの廊下、黄ばみかかつてところどころ穴のあいた障子、そして、薄く香るタバコの匂い。匂いの発信源と思われる部屋の前で、雛子は3人を振り返る。

「ここに、その人物がいます。さあ、ここ対面へ

ガラつと勢いよく襖を開け、中の人物に向かつて声をかける。

「じい！ 仲間、連れてきたよ～」

雛子に続いて部屋に入った夜季は、背筋にいやな汗をかいた。

本や書類が散乱した部屋の中央に、胡坐をかけて座つていたのは、ヨレヨレの和服に身を包んだ白髪の老人

「あああ！ てめー、昨日のジジイ！」

驚いた夜季が叫ぶと、老人は咥えていた煙管を口から離してニヤリと笑つた。

「ほう、お前さんか。奇妙な縁があるもんだな」

老人の口から洩れるタバコの煙が、夜季には地獄の瘴気のようを感じられた……。

第4章・淡い結びつき

「なになになに? モキとじこつて知り合は?」

雛子が一人の顔を見比べながら尋ねる。

「おうよ。拳で語り合つた仲だ。のうへ」

”じい”と呼ばれた老人は夜季に向かつて拳を突き出すが、夜季はショックの表情のまま動かない。

「あ、あの~……」

代わりに、凛が口を開く。

「初めまして。リンと言ひます。彼は、ゴーシです。」

夕紫は「よろしく」と言ひ……はしなかつたが、頭を下げる。

「おう、よろしく。やつちのコンとやら、おなじかと思つてたら男だつたんか」

「ええ……男です」

「ねえ、じい。リンってキレイだよねー」

雛子が凛の後ろ髪をいじりながら笑う。

「本当にのお。女装してもおかしゅうないな」

「いえ、あの……僕、そつちの趣味は……」

凛が苦笑してこむと、よつやく夜季が正氣に戻った。

「あ、あんたがスー「のじ」さんってことは……もしかして、その
髪……」

「その通り。ワシも生まれつき白髪だ」

再び煙管を加えて、”じい”は」ともなげに呟つ。

「もへ、じいつたら。未成年者の前でタバコ吸っちゃダメっていうでしょー!」

「おひ。スマン、スマン」

雛子に咎められ、灰を皿に落とす。

「若いころは大変だったのう。周囲からは気味悪がられてな。ひどいコンプレックスだったが、今では……」

「今じゃ、あたしもじいも気にしないもんね

二人は肩を寄せ合ひて笑う。

「……つこでに、色々気にしなきゃいいような……」

「なんか言つた? ヨキ」

「いや、別に。……それより、映画の話はlixirすんだ?」

聞きたいことは後回しにして、夜季は本題を促す。おやうく、早く話を済ませてこの場を立ち去りたいのだらう。

「やうやく。まずは、コレ見て」

「どれだ?」

離子は畳の上に散乱した本の海を揃やす。

「コレ。この、新しいやつ」

その本は、周囲の古ぼけた本や書類とは異なつて、比較的新しいきれいなカバーに包まれていた。

「それ、『神の唄う街』?」

読書家の凛が声を上げる。確かにその本は、老若男女を問わざる人気の高い小説・『神の唄う街』であった。

「そう、それ。この本の作者、誰か知ってる?」

「あべひるわこ
哩倉浪才……先生だよね」

凛が答えたとき、今まで黙っていた夕紫が口を開く。

「あぐりひつむご……あうひり……」

「なんだって? コーシ」

夜季が聞き返そつとすると、突然”じい”が高らかに笑いだした。

「ハツハツハ！ なんだ、もう気が付いたんか」

「あ？ なんのことだ？」

夜季が怪訝な顔をしていると、今度は凛が閃いた。

「あ、そうか！ なるほど……」

夜季一人だけがわからない。

「おい、なんなんだよ……」

「教えてあげよっか？」

雛子が優越感たっぷりの表情で夜季の脇腹をつつく。

「うるせえ。自分で考える」

夜季は雛子の手を避けながら言つが、今一つピンとこない。

「ヒントをやね。ワシの本名は朝浦 義朗あさうら よしろうだ」

”じい”がそつ告げた時、よつやく理解した。

「えつと、つまり……」あわてり “さわづ” って名前のアルファベット入れ替えると……

「セウ。」あぐら らうさいだ。つまり、阿倉浪才とはワシのことであり、その本はワシが書いたものだ

「へー……つて、ええつー？」

夜季は改めて驚く。それはそつだろう。文学に興味の無い自分で知っているほど著名な小説家が、目の前の老人と同一人物だと言われても急には納得できない。

「ホントだよー。あたし、じいが原稿書いてるの見たことあるもん

誇らしげに雛子が胸を張る。

「マジかよ……」

「まあ、それは置いといと、と。映画のことだつたのつ

”じい”が強引に話を戻し、雛子が説明する。

「この小説・『神の照り街』を映画化したいの。高校時代の思い出に

「……」

「前々から、じいの小説を映画にしたらおもしろいだらうなーって思つててさ。そんで、高校生活最後の文化祭でやつちやおつかな…つて

「留年すつやあ来年にもできるだ

夜季がぶつめりほづて言ひ捨てると、雛子はふくれつ面になる。

「今年やりたいの！ ね、手伝つてよ～」

……正直に言つて、この時の雛子の説明は今一つ不十分だ。しかし、今この時点では雛子が話せるのはここまでなのであつた……

「僕はいこよ」

やはり、最初に贊同したのは凛であった。

「畠倉浪才先生とつながりが出来て、光栄です」

「お～い……リン……」

夜季は「うそやつした声を出す。どうせなにを言つても無駄だと知りながら。

「光栄、か。嬉しい」とを言つてくれるの。……そつちの、ユーシとやらぬびうだ？」

視線を向けると、夕紫は無言で凛の肩に手を置いた。

「賛成、らしいね」

凛が言つと、今度は夜季に視線が集まる。

「ねえ、三キ……」

「オレはやうじねーぞ！ 映画も小説も興味ないからなー！」

流れを振り切るよつこ声を荒くする。

「 もう用はない。オレは帰るからな」

「 ワキー。」

襖を開けて廊下に出て立つとある。その途中で、”じい”がボソッと声を投げる。

「 また、逃げるんか」

「 ああ？」

夜季は立ち止まり、不機嫌をあらわにして、”じい”を睨みつける。

「 昨日の野球と回りだ。少しだけ手を出しつけて、自分が満足できないと思つたらすぐには逃げる。それでいいんか？」

「 ……なにが言つてえんだよ」

「 ！」今まで来たら最後まで付き合いつづけないとだ。それに……」

「 それには？」

”じい”は腕を組み、顎をあげて見て立つよつこ声。

「 昨日あれだけ口けられて、このままでいいんか？」

「 ぐつ……」

この一言が効いた。アラウマにまでなりかけたのだから、昨日の出来事を持ち出されると弱い。

「おまかせ」と、オーラーは無む言ごんを返した。

「うつせえ！ わかつたよ！ オレも協力してやる。だが、ジジイ。
お前には絶対いつかやり返してやるからな！ 覚悟してろよ」

勢によくまくし立てて、夜季は背を向ける。

「明日の土曜日、午後1時にまたここで打ち合わせだからねー！」

後ろから飛んでくる雑子の声を聞きながら、夜季は拳をにぎりしめて帰つて行つた。

第5章・飽きる少年・説く少女

半ば強制的に離子に協力することになった日の夜。夜季は自宅の電話で、凛から連絡を受けた。

「明日の一時、僕はちょっと遅くなるからコーチと一緒に先に行つて。それと、僕達の他に協力してくれそうな人がいたら声を掛けといつてスーコさんが言ってたよ」

電話を切り、夜季はフッとため息をつく。

「つたく、リンは人付き合いが良すぎるんだよなあ……結局オレまで巻き込まれちまた」

夜季は中学時代、「不良」の肩書を背負っていた。同じような仲間たちと群れて行動し、ケンカやタバコもしじつちゅうだつた。しかし、高校に上がると同時にそれらのグループを離れた。

理由は「飽きた」からである。元々なにか理由や目的があつてつぱつていたわけでもない。ことあるごとに一々大人に反発するのも面倒だし、わざと見せびらかしながら吸うタバコも美味しいとは感じられなかつた。

不良グループをやめたと言つても、当然マジメになるわけではない。気に入らないものは徹底的に嫌う性格は変わらないし、授業もよくサボる。ただ、2年の冬、ほんの気まぐれに少しだけマジメに勉強に取り組んでみた時期があつた。それは本当にただの気まぐれだったのだが、その時一緒に勉強を手伝ってくれたのが凛と夕紫だった。

「もしよかつたら、昼休みに生徒会室に来ない？ 僕たち、いつもそこでお昼食べてるんだ」

勉強を教える合間に、凜がそう誘つた。それからすぐに夜季の中で勉強のブームは過ぎ去つたが、三人の関係は今も続いている。

「他に手伝ってくれそうなやつ？ そんな暇なやつが他にいるかつてんだ」

ふてくされるよつてベッヂで寝転んだ夜季は、あるハッキリとした確信を持つていた。

「ジジイに煽られて参加することは言つたが、俺は飽きっぽいからな……どうせすぐにはやめるに決まってる」

そのまま、夜季は眠りについた。

翌日。朝浦家の二階に離子、”じい”、夜季、夕紫が集まっている。

「リンは遅くなるって言つてたぞ

夜季がそう云ふると、離子が聞き返す。

「遅くなるって？ なんですか？」

「電話で

「連絡手段じゃなくて！ 理由を聞いてるの～！」

「ハツハツハ！ そう来たか、ヨキ」

「離子がむくれると、”じい”が高笑いをした。

「お前さんにも、冗談を言つづらうの知恵はあつたんだなあ

「あ？ ビーウー意味だ」

「褒めたつもりだ」

褒めるのと馬鹿にするのを同時にやつてこる。

「リンが来ないかあ…… アンタ達の中で一番マトモなのこ……」

離子がつぶやくと、夜季はますます不機嫌になる。

「俺もやつぱり帰らうかな」

「あーん！ 冗談だつてば～！ 帰らなこでよ～」

「カハハ！ おもしろいのう、お前らは

……ただ一人、夕紫だけが静かだった。

ふと、”じい”が窓の外を見ると、ある人物が道の向こうからこちらに向かってくるのが見えた。

「おこ、あいやありんじやないか？」

「え、エリーベー。」

雛子も窓から首を出してその人物を見つける。

「本当だ。おーい！ リン……が一人いる……？」

「なんだよ、つるせえな！」

突然の大声に夜季が驚き、雛子を手で押しのけて窓をのぞく。

「ん？ あれは……なんだ、リンの妹じやねーか

「え、リンって妹いたの？」

再び雛子が窓の外を見ようと/orして、全身で夜季を押しのけようとする。

「もう一回よく見せる〜！」

「うわーー？ ど、どうやってるから、そんなにひつくなー！」

背伸びした雛子の白い髪が、夜季の鼻孔をわずかにくすぐる。

「んー？ モキ、ちいと顔が赤うなつとらんか？」

”じい”はニヤニヤと笑つてからかい、夕紫は凜と妹を迎えて下へ降りて行つた。

「ジジイ、なんか言ったか？」

「いーや、なんにも」

わざと険しい表情をつくるが、”じい”は相変わらず一やけたま
まだ。

やがて、夕紫が一人を連れて戻ってきた。

「おはようございます。睡倉先生。キャストに使えるんじゃないか
と思って、妹を連れてきました」

紹介された少女は、艶のある滑らかなロングヘア、白く透き通
るような肌、上品に整った顔立ち等、凛とよく似ていた。しかし、
全体の雰囲気は兄のそれよりも「硬い」印象だった。

「西条 玲織、高校2年です。よろしくお願ひします」

しとやかでありながら、よく通る声だ。

「いい～！ この子、てっげない～！
るかなと……」

「いい～！ この子、てっげない～！
るかなと……」

突然、雛子が叫んだ。

「て、てげな……？」

「とても、とかスゴク、という意味だ。スーパーは時々方言ができるだ。

「シンの影響でな」

香氣に解説する、『じこ』をよそに、雛子のトーンショーンは高まる。

「いいなあ、こん子もでげキレイ～！ 羨ましうさるよあの黒髪～！ リンが女の子になつたらこげな感じなるつかあ……この子も映画参加していくやつと？ 使えるー、使えるよこの子ー、ヒロイン決定！」

「は、はあ……」

妙な勢いに王織は気押されていく。

「スーコ、落ち着け。とつあえず落ち着いて標準語に戻れ

「リン、ウチこむちょーだい！ こん子、ちょーだい！」

「キ、キャアッ！？」

夜季のシンコロムはむなしく無視され、テンションの上がりきった雛子は王織に飛びついたのであつた……。

第6章・マイペース

小説家・畠倉浪才（本名・朝浦義朗）の代表作『神の照つ街』。その本文から一部を抜粋してみよう。

主人公・萩野太一は小学生の頃から”いじめられっこ”だつた。いじめられる原因は、太一の母親が伝染しやすい病気にかかっているということである。

「あいつの家には病原菌がうじゅうじゅういるわ」

「あいつ自身も病気まみれだ」

根も葉もない、ただの先入観と噂だけで始まった”いじめ”。太一が中学生になつてもそれは続いた。むしろ、より酷くなつた。

「どうして僕がいじめられるの？ 僕がなにか悪いことをしたの？」

その問いには誰も答えてくれない。いつしか太一は、生きることに絶望するようになった。それでも大学にまでは進学した。しかし、太一の心はいじけたままで、母の死をきっかけに”死”を選んだ。

「ソロから落ちれば、楽に……」

歩道橋の上で、途切れることなく行きかう車たちを見ながらそうつぶやいたとき、ふと思い出したのは、まだ健康だったころの母の歌。

白く広がるキャンバスに 好きな色や形を描こう

私が祈つて あなたが望めば デジカメでも紙にも飛んで
いける

気がつくと、太一は泣きながらその歌を歌っていた。

「お母さん……僕を産んでくれてありがとう。でも、僕はあなたの
せいでいじめられました。友達の作り方もわからない、孤独な人間
になつてしましました……」

歌い終えた太一が歩道橋の手すりによじ登ろうとした時、後ろから
声をかけた女性がいた。

「ありがとうって言葉が出て安心したわ。まだ少しあはマトモな思
考があるなって」

年のころは太一と同じくらい。その少女は続けて言った。

「今の歌詞、あなたの自作？ あたし、バンドやつてるんだけどさ、
もう一度聴かせてくれない？」

そして、太一の人生は変わった

「続きを読むは、自分で読んでよね」

「面倒くせえな……」

夜季はこの小説を読んだことがないため、雛子にあらすじを説明してもらっているところだった。

「とりあえず、配役を決めるしますか。ヒロインはミオちゃんで決定として……」

ノートを取り出してメモする。

「ちいーっとイメージが違うよつた気がするがのう」

”じい”の言つとおり、この小説のヒロインは普段は明るく、ノリの軽い人物であった。冷静で硬いイメージの壬織では合わないのではないか？

「大丈夫ですよ。壬織は舞台に立つと人が変わりますから」

凛が笑つて壬織の肩に手を置く。

「ま、他にやれる女もおらんからの」

「でしょーーー？ ……つー、じい、じい？ あたしもいるんだけど……？」

雛子が一応訴えるが、片や昼間からTシャツとジャージ姿で色気ゼロの白髪娘。片や、大人びた服をキチつと着こなした大和撫子。結果は口を見るよりも明らかだ。

「……どーせ、あたしは自分でヒロインやるつもりは最初からなかつたけどね」

「じゃあ、なにをやるつもりなんだ？」

夜季が聞くと、雛子は腕を組んで答える。

「あたしは、監督に決まつてゐるでしょう……ちよつとした脇役ならやつてもいいけど」

雛子の言つ、「映画をやりたい」とは、自分が映画の画面にいることではないらしい。

「んで、主人公は……」いじめられっこかあ…………三キ

「絶対に断る！」

強い口調で否定すると、”じい”がまたもニヤニヤと笑つ。

「お前さん、どうかつかつちゅうじこじめる方が合^むつたんなあ

「…………めーからいじめてやるのか？ジジイ

実際には、夜季の方が”じい”にいじめられてくるのだが……。

「ん……玲がやつたら、女の子たちからす」クレームが来そ
う……。姉妹で主人公ヒロインつてのもアレだしね

「姉妹つて……僕は男なんだけど……」

凜は抗議するが、雛子は無視する。

「残るは……コース……」

一応、全員が夕紫の方を見るが、仲間内すら口々にしゃべらない夕紫が引き受けるわけもなく……。

「どうちみち、僕たちだけじゃ全然人数が足りないしね。他の生徒たちにも協力してもらわないと」

「うーん、そうだよねえ。でも3年生は受験やら就職活動やらがあるし、1、2年生も部活の大会とか多いし……」

早くも手詰まりを起こしてしまった。気まずい空気が室内を覆う。

「セヒセヒ、こっからどうすつとかのう？」

”じい”だけが笑っていた。

「三キ、なんか名案はないんか？」

「……でわざわざ非協力的な夜季に聞くのだから意地が悪い。しかし、今回はそれが功を奏した。

「なあ、これつてうちの生徒じゃないとダメか？」

何かを思いついたようだ。

「別にいいけど……なんか心当たりあるの？」

「俺の知り合いに大学生がいるんだが、その人が年中ヒマだ、ヒマだって言つてるからよ。主人公やらせてみねえかなつて……」

雛子は少し考え込み、答えた。

「いんじやない？ この小説って大学の話だし」

「ちなみに、どんな人？」

凛が尋ねる。

「けつこうついイイ加減でマイペースで……けど、少しは演劇の経験があるつづってたな」

「イイ加減でマイペース、か。少々扱いににくい人間だのぉ」

……そう言う本人もイイ加減でマイペースなのだが。

「んじゃ、今度連れてきてよ、その人。いつ来れるかわかる？」

「別に……あとは卒論だけ書けばいいって言つてたから、いつでも来れると思う」

「それじゃあ明日ね。この時間に」

そう言って、雛子はパタンとノートを開じる。

「今日の打ち合わせはここまでー、終了ー！」

「えっ？ まだほんと何も進んでないけど……」

「人数が足りなきゃ話し合いしても意味ないでしょ。今からの時間は親睦を深めるために外で遊ぶとしますか」

決定、といひ風にノーサイレンをつける。

「おこねこ、こんな調子で本当に映画なんつくれんのかよ……」

この間やはり、本氣で心配してくる夜季であった……。

第7章・常識とは何か

太一は少女に連れられ、その門をくぐった。中にいた男たちが出迎える。

「あたしの仲間たち。変なやつばつかだけど、話してみると酔とおもしろいわよ」

少女がそう言つと、笑い声が響いた。

「ツグミー、変な奴、はねえだろ？ がよー」

「俺たちが変なら、ツグミもねつだろ？ 類は友を呼ぶからな」

「あたしはアンタたちとは違うの」

口は悪いが、男たちの眼に悪意はない。小さな子ども達がじやれあつよくなやり取り。

「紹介するわよ、この間話した子。タイチ君」

「タイチ……うん、いい前じゃねえか。よろしくなー。」

よろしくお願いします。そんな言葉が自然に自分の口から出たこと、太一は驚いた

「よろしくお願いします。有田ありた 駿まもる 衛。大学4年です」

田曜日、朝浦家の2階。夜季の紹介で連れてこられた男は、やつ
”じい”にあこがれした。

「おひ、よひしゅう。話に聞いとつたよりはマトモだな」

「言こながら”じい”は煙管を取り出でんとして、思ことどりまつた。

「あ、オレ別にタバコとか平氣ですよ。自分でも吸いますし」

「じうも、と手で促しながら有田は胸ポケットからタバコの箱をちらつかせる。

「んにゃんにゃ、別にお前さんのことなんかじーーっとも『遣つたらんわい。肺がやられようが煙たからうがな』

「は……」

本人を田の前にしてどうどうと言へるものだ。有田もポカンとした表情になつている。

(このジジイ……無礼つて言葉の塊みてえなやつだな……)

夜季も呆れた田つきだ。

「ただ、ワシの可愛い、そりゃあもう可愛い孫に止められるとからなあ。ガマンせにゃならんのだ」

”じい”が煙管を壊こしまつて、当の「可愛い孫」が部屋に入ってきた。

「ただいまっ！……あれ、お姫さん？」

「どこ行つてたんだよ、スーコ。この人がオレの知り合いのマモルさんだ」

有田衛 ようじへ

有田があいさつをするが、離子は返さず、じっと有田の顔を見て
いる。

「この人が元・いじめられっこ役……」

「ダメか？」

夜季が聞くと、少し間をおいて答えた。

「OK、OK！」うん、いじめられっこ、出来そう

「それは褒めとるんか？」
「けなしどるんか？」

お前が書うな、
と夜季は思つただろう。

「そんじゃ、よろしくね！ マー君！」

「おい……スーコ。その人俺たちより4つ年上なんだが……」

夜季はそう言おうとしたが、有田に止められた。

「いや、別にかまわねーよ。マー君つていいじゃん。なかなかセン

スあつて

「でしょ？ よりしくね～マー君」

「よろしく、えーと……スー、口」

笑い合いつゝ一人を見て、夜季はやれやれと肩をすくめる。ヒ、ヒヒ
で”じい”の目が光った。

「な～んか、気にくわんようだな、コキ」

「あ？」

「スー口が衛と仲良しうしおうしが気に障るか？」

いつもの口ハ丁が始まった。

「それよりもよ、スー口。なんでリン兄妹とコーリーが来てねーんだ
？」

”じい”に絡まれたら、相手せずに話を変える。これが夜季の学
んだ対処法である。

「あの3人は、夜季達が来るよりずーっと早く来てたよ。で、ちょ
つと学校までお使いに行つてもらつてるので」

「お使い？」

「うん。文化祭で映画やること、まだ先生たちの許可もらつてなか
つたからさ。説明して許可もらつて来てつてお願いしたの

カラリととんでもないことを言つ。

「ちよつと待てや、スーゴ。お前、今まで許可なしでやつてたのか？」

「うん」

「許可が出なかつたらどうするつもりなんだ？」

「」の質問に、雑子は笑つて答えた。

「大丈夫だつて！ 超・優等生のリン姉妹と天才ユーシだもん。先生も甘く見てくれるでしょ」

「いや、そういう問題じやなくてだな……」ついつて、最初にお前が許可もらつてから仲間を集めるのが普通だらうが」

「へ？ どういひとつ？」

「だからなー！ つまつ……」

マジメに議論しようとする夜季だが、」でまたも邪魔が入った。

「普通にやつとつたらおもしろくなからう。ダメならダメで仕方ない。許可をもらえりや幸運、つちゅう」と最後まで突っ走れる。一種の願懸けだ」

「ん……よくわかんないけど、そーゆーこと…」

結局、なにもわかつていの雛子であった。

(ま……どうせ学校の教師共もバカじゃねえし、こんなフザケた企画通るわけがねえ。許可がなけりやあオレもすぐにやめられるしな)

夜季の願望混じりの考えは、10分後に戻ってきた3人の報告によつて碎かれた。

「映画、許可おりたよ。木崎先生がすぐに引き受けてくれたんだ。体育館貸切で使つていいってさ」

「おおーー！ さっすがミオリン姉妹アンドコーラー！」

「み、ミオリン？」

「だから、姉妹じゃないって……」

西条兄妹が雛子にツツ「//」を入れる中、夜季は心の中で叫んでいた。

(うつうの学校はマトモなヤツいねーのかよ！…)

と。その心を読んだかのように笑う者が約一ヶ。

「秀才の人気つぶりはスゴイのう。……ヨキ、お前さんがいひとつたら門前払いだつたかもしれんのにな。ザ・ン・ネ・ン」

夜季は文字通り頭を抱え込んだ。一方、凛たちは新メンバーとの交流を繰り広げている。

「あー、どうも初めまして。ミキとは近所の有田です」

「初めまして。西条凜です。……念のためことわっておきますが、男です」

「えーっ!? ウソ、マジ! ?」

そこに雑子が割って入る。

「アハハ。マー君も間違えた」

全員が和氣あいあいとしていた。夜季を除いて。

第8章・人望と書いつけの力

ツグミは、渡された歌詞を見て考え込んだ。

「どうかな……それ」

「うーん、そうねえ……」

太一は睡をのんで判定を待つ。

「よししー 合格!」

「ホ、本当ですか!?」

「上出来よ。やっとウチのバンドもオリジナル曲がつくれるようになつたかあ……」

歓喜の声でツグミが息をつくと、頭にバンダナを巻いた男 隆

二 が言った。

「作曲は俺に任せろ。タイチ、いい仕事をしてくれるな」

「い、いえそれほどでも……」

「タイチ。別に敬語で話さなくともいいのよ? 仲間なんだから

仲間。太一にとつては、その一言がどんな褒め言葉よりも嬉しかった

「おひはつよー、ミキ」

月曜の朝。雛子は教室に入ると同時に、クラス中に聞こえるほどの大聲で夜季に声をかけた。

「ミキって学校にはちゃんと来るんだよね~」

(声でけーんだよ、バカ……)

周りの生徒がチラチラと一人の顔を見比べる。どちらかというと排他的な夜季と、性格は人なつっこいが白髪のせいで敬遠されやすい雛子。この一人の組み合せはかなり奇異に見えるのだ。

「今日から、あたしとミキちゃんも生徒会室でお昼食べる」とことじたからね

席について後ろを向き、にこやかに話しかける。

「……勝手にしろよ」

「もー、朝っぱらからトンショーン低いよ~? 冷たいなあ……」

雛子はふくれつ面になるが、朝っぱらからやたらとトンショーンが高いのもいかなものか。

「んで、お昼食べ終わつたら、映画に協力してくれそうな人探すからね」

「オレは一人見つけたからいいだろ?」

「だーめ! みんなでやるのー。」

「」の声で、またも周囲の視線が集まる。

(「うせえな。 もつ)

夜季はとにかく会話を終わらせたかった。好奇の視線から解放されたかった。

「全員参加だからね。 ヨキ、わかつた?」

「……」

夜季は無視して机に顔を伏せた。が、会話終了を要求する合図は離子には通じなかった。

「ヨキ~、聞いてんの~?」

夜季の逆毛に手を突っ込み、もしゃもしゃとかき乱す。

「や、やめろ! バカ!」

「うわやつ ゴメーン……」

激しく離子の手を払い、怒りの目で睨みつけると、よつやく離子も大人しくなった。

あの一人、なんかあったの? 仲いいね。

そんな内容の話し声が、教室のあちこちから聞こえてきた。

昼休み。生徒会室に、メンバーが集まる。

「ミオちゃん、小学生のころから演劇やってたって本当?」

「はい」

いつもは男3人の部屋が、女子2人が入ったおかげで華やかだ。

「見たいなー、小学校のミオちゃんの演技」

「昔の演技はちょっと……今見ると恥ずかしいです」

「ウチにビデオあるから、今度見る?」

凛が口を止める。

「ホントー? 見たい、見てみたい!」

「ちよつと、兄さん……」

「照れなくてもいいのに」

困った顔の壬織を凛がからかい、笑みを浮かべる。

一方、雛子たちが盛り上がるほど、不機嫌で無口になるのは夜季と夕紫だ。いや、夕紫は別に不機嫌なわけでなくいつも無口なのだから問題はない。

問題は、夜季だ。ここ数日、自分の思い通りにならないことばかりが続いているからだ。その元凶である離子が楽しんでいるのが気にくわない。

(面倒くせえ、とつとと逃げるか)

会話に夢中になつている離子に見つからないよう、夜季は静かに移動してドアを開ける。その時……。

「あっあの~……」

ドアを開けると、廊下に3人の女子が立つていた。学年章を見るといずれも2年生だった。

「映画つべつてるのつて、ここですか?..」

「ああ?」

「あ、ヨキ。その人たち中に入れて」

夜季がイラついて睨みつけるとその生徒は一瞬おびえた表情になつたが、部屋の中から凛の声がして安堵の色を浮かべた。

「失礼します」

おずおずと足を踏み込む。

「リン、どしたの?」の子たち

「昨日、先生に許可をもらいにいったついでに、部活をしていた人達に声をかけてみたんだ。興味があつたら、昼休みに生徒会室に来てって」

「あの、私たちの部活って大会とかないんで……もしよかつたら」

一人がそう言つと、後の一人もよろしくお願ひします、と頭を下げた。

「うひやー、一気に3人も!？」

雛子が目を丸くして驚きつつ、喜びの表情をつくる。

「おいおい、なんかゾロゾロ来たぞ……」

夜季の声に反応して一同が廊下を見ると、さらに数人の生徒がやつてくるのが見えた。中には男子もいるが、大半は女子だ。

「あのー、俺たちも映画、いいッスか?」

「私も……」

その後も続々と数は増え、20人近い生徒が集まつた。

「けつこうヒマな奴がいるもんだな」

夜季も生徒会室に戻っていた。自分で探しに行く仕事をしないですんだからである。

有志者たちを部屋の片側に集め、凜が前に出る。

「それじゃ、まずはリーダーからあこがれをもひおつかな」

そう言って離子の方を向くと、全員の視線がそつちに集まる。

「副会長さんがリーダーじゃないんだ」

「あの……髪の白い人？」

ざわつく生徒達の前に離子が立ち、オホン、と一つ咳払いをする。
「えーと、今回の企画はそもそもあたしが出したもので……リンは
まあ、いわば助っ人でして……」

(本人よりもいい仕事してるけどな)

夜季は心の中で思つた。

「今こうしてみんなが集まっているのも、あたしが提案したからな
のであって……」

(お~お~お~いおい……集めたのはリンの人望だらーがよ……)

もはや怒るのを通り越して呆れてしまつていて。

「まあ、とにかく！ 毎年毎年地味いーな文化祭を、みんなの手で
思いつき盛り上げてやりたいわけでして！ それと同時にこの素
晴らしい小説・『神の喰う街』をもつと多くの人たちに知つてもら
いたいわけで！ そのためにみなさん、頑張りましょー！」

おお～、と感心する声が聞こえる。もとも、離子の本当の目的は
そこからでもないのだが……それがわかるのは、まだ後のこと
である。

第9章・根本的な指摘

好調。そんな日々が続いた。

「いやー、今日の演奏もバツチシだつたわね～」

「タイチが入つてからいいことづくめだな」

「い、いえ……僕は歌詞を書いただけで……」

太一は頭をかきながら照れ笑いをする。

「ほら、また敬語になつてるつてば」

ツグミが指摘する。

「あ、ゴメンなさ……ゴメン。ツグミ」

「アハハハ！ 謝る必要はないのによ」

隆二と仲間達が笑つた。

「そんじゃ、俺たちは早めに帰らせてもらひませ

「うん、おつかれー」

楽屋には、太一とツグミだけが残つた。

「タイチ。今から何か予定ある？」

「ううん、なにも」

「よかつたらや、買い物付き合ってくれない?」

「え?」

太一の動悸が激しくなった。

「いい?」

「あ……うん」

「ありがとう。なんか、デートみたいだね。」

みたい、ではなくて本当のデートならもっとよかつたのに。太一はそう思った。

太一の生活は順風満帆に回っていた

「というわけで、活動は順風マンタンあります!」

「順風満帆、だな。それを言ひなひ」

放課後の朝浦家。離子が”じい”に今日の出来事を報告している。

「それにしても、大半が女子とはなあ。さすがモテる男は違つわい

「い、いえ……コーランや壬纏も一緒にいたから……」

「ヨキが一緒にいたら逆効果だったかもね」

離子がからかうよつて言つたが、夜季は無視する。

「んで、とりあえずまだ他に人が集まるかもしれないから、先に脚本を作らうかなって思うんだけど」

「ちょっと待てや、スーコ」

夜季の指摘に入る。

「お前、脚本もなしに配役とか決めようとしたのか？」

「うん。基本的に原作そのまんまだし。わざわざ新しく脚本作る必要もないかなーって」

「映画やお芝居をする時には、やっぱ脚本がないと……」

壬纏がおずおずと口を開く。

「全部のシーンを入れるのも難しいしね。どの場面を省くか、といつのも考えないと」

凛がそう言つと、離子は怪訝な表情になる。

「ええー？ あたし、原作を丸いと映画にしてしまうのになー

「2か月しか期間がねえんだからムリだな」

「へへへ……わかった」

「まあ、その辺も含めて脚本考えようか

渋の雛子を凜がなだめる。

「おれは原作読んでねーから参加しないぞ」

「夜季がそう言つと、誰かに肩を叩かれた。……振り向かなくとも
わかる。」 “じい” だ。

「そーか、まだ読んどらんかったか。そんじやあ宿題だ」

例の本を押しつける。

「今日中に全て読み終われ。その気になりゃあ2時間もかかるん

「ああ？ めんどくせえよ、そんなの」

「夜季が本を畳の上に落とす。すると、”じい” が眉をひそめ、夜
季に鼻息がかかるほど顔を近付けた。

「ワシがやれと詰つたらやれ。お前さんは常になかやらせておか
んと、スグに飽きてどこかに行つてしまつたタイプだからのう。」

「

「へへ……顔近づけんなよ、ジジイ」

夜季は口で反抗しつつも、”じい” の有無を言わせぬ迫力に圧倒

されていた。決して荒い声ではないが、どこか従わざるをえないような口ぶりだ。

「わかつたよ。読めばいいんだろ！」

本を捨い、逃げるよつに”じい”から離れる。

「つたくよお……」

仕方なくページを繰り出すと、またも声がかかる。

「じい」で読むな。作業しとるやつらに迷惑だからな。下のリビングで読んどけ

「いやこかうるせえな」

文句を言にながらも、夜季は素直に従つて部屋を出た。朝浦家の
人間には逆らうだけ無駄だと悟つたようである。

(そういえば)

ふと、夜季は思った。

(じの家、スーコビジジイ以外に人が住んでんのか？ 全然気配が
ねえけど……)

気になつて玄関の靴箱を調べてみると、雛子と”じい”的物と思われるものしか見つからなかつた。

(祖父と孫の一人暮らしとかよ……スーコがやたらと甘えたがりなの

はそのせいか？）

天井を見つめ、しばしの間その向こうにいる離子のことを想う。しかし、すぐにその考えを振り切り、ソファーに寝転んで本を開く。

「その気になれば2時間もからねえ、か。俺なら3時間ぐらいかかるかもな……って、最終的に何時になるんだよ、読み終わるの…」

…

ブツブツとつぶやきながら、とりあえず読み始めた。

一方そのころ、2階の脚本製作チームはといふと…

「ねー、じい？」このタイチのお母さんが作った歌つてさあ……歌詞が途中までしか書いてないけど、最後まで考えてあるの？」

「んー……知つてどうする気だ？」

「これで、ラストシーンで歌う場面があるじゃん。その時に実際に歌つてみたらおもしろいかなあーって思つんだけど」

離子はノートにメモを取りながら提案する。

「うーん、雰囲気を作るのにはいいかもしれないけど」

「人前で歌つた経験はあんまり……」

壬織が自信なさそうに言ひ。

「ミホちゃんつて声がいいからさ。歌もイケると思つんだよね」

「まあ確かに、壬織は音楽の成績もいいけど」

「ちゅうと、兄さん……」

慌てて兄の口をふたむとするが、避けられた。

「というよりも、お前ら兄妹は苦手な教科とかあるんか？ ューシもな」

「あつコース……そつこねばいたんだ」

”じい”のセリフで、雛子が夕紫の存在を改めて認識した。

「いたんだって……ずっと一緒にいたんだけど」

「全然しゃべらないから気付かなかつた。ねえコース、何してんの？」

見ると夕紫は、雛子が途中まで書いた脚本を書き直している。

「どうか間違えてる？」

雛子がノートを覗き込みながら聞くと、夕紫はわずかに口を開いた。

「……漢字ぐらい使え」

雛子の書いた脚本は、ほとんどが平仮名で書かれているのであつた……。

第10章・謎多き血筋

毎日、田を覚ますのが楽しみになっていた。今日もまたツグミに会える。仲間たちと笑い合つことが出来る。そんな思いが、太一を動かしていた。

「おはよう、ツグミ、隆二」

「おはよー、タイチ」

敬語を使う癖もすっかり直り、本格的にメンバーとしての意識が高まってきた。

「あれ？ 隆二、いつものバンダナは？」

チームリーダー・隆二のトレーデマークである派手なバンダナを、今日は巻いていなかつた。

「ん、ああ。あれは……昨日、ちよつと汚しちまつてなあ。洗つてんだ」

「お前、あのバンダナ丸一年ぐらじ洗つてないだる」

仲間の一人が野次を飛ばす。

「うつそ。隆二アンタ、そんな汚いもん頭に被つてたの？」

ツグミが顔をしかめる。

「んなわけねーだろ！　せいぜい……一か月ぐらいだ。洗つてないのは」

「それでもキタねーよ…」

部屋中に笑い声が響く。そんな中、太一は気が付いた。隆一の口に焼けた頬に、不自然なアザができていることに

バタン。という音で、夜季は目を覚ました。

「ん……んん……？」

一瞬、どこにいるのかわからなかつた。ついすらと開いた眼には、見慣れない天井があつた。いつもの自分の部屋ではない。

「ビニだ、ヒニ……」

むくりと上半身を起こそうとするが、体の上に乗つっていた何かが床に落ちた。それは例の『神の呪う街』だった。

「あ、オレ、寝ちまつたのか……？」

ようやく、状況を把握した。夜季は朝浦家の一階にあるリビングのソファーで読書をはじめ、そのまま眠つてしまつたのだ。

「あー！　ヨキ、おはよ～」

隣のキッチンに続くドアが開き、雛子が入ってきた。それと同時に

に、独特の香ばしさにおいが漂つてくれる。

「今、何時だ？」

「もう8時過ぎだよ。みんなはもうみんな帰っちゃってる」

「わうか。じゃあ、オレも帰るかな

と言つて夜季が立ち上ると、キッチンから別の人影が入つてきた。

「ついでに、メシぐらい食ひついで」

「までもなく、”じい”である。

「ヨキの家人には、リンが電話しておくれた。遅くなるかもしれないから、食事はよそで済ませるって」

「……そんな手間かけるなら、帰るついでにオレを起こしてくれればよかつたのによ……」

「それじゃあ面白くなかろう」

”じい”にとっては、常識や倫理よりも「面白さ」が優先なのである。

「とりあえず、『ハングル食べよ。今日はカレーだからね

仕方なく、夜季は一人とともに食卓に着く。

「「ソレ、お前がつべつたのか？」

「ヤーだよ。言つとくけど、レトルトじゃないからね」

ボリュームのあるカレーに、サラダの組み合わせ。典型的な家庭料理の一例だ。

「お……けつ」いつ美味しい」

「でしょ～？」

離子が得意げに胸を張る。ちなみに、夜季と”じい”にはお茶が出されたが、離子はいつものミルクである。

「ま、人んちでメシ食わせてもらひて、まずいとは言えんわのう。もつともそれを抜きにしてもスーパーのメシは美味しいがな」

いちいち余計な一言を加えないと褒められない性格らしい。

「一人暮らしだからね。あたしが料理担当なの」

「やうか……」

両親は？ と聞くとして、夜季は思いどおりだった。あまりプログラマーに踏み込むべきではない、と判断したからである。

しかし、当の本人達から話し始めた。

「スーパーの両親……ワシの娘夫婦は隣のS市に住んどる。別に向こうで親子三人暮らしをさせてもよかつたんだが、……

「あたしが、自分でじいと一人暮らしするのを決めたの。じいと一緒に楽しいもん」

「ふーん……」

深い理由や事情はまったくなかつたらしい。夜季は拍子抜けた返事をする。

「ワシにとつても、孫がそばにいてくれるとありがたい。長年住み慣れたこの家を離れるのもいやだつたしな」

”じい”はあつといつ間に食事をたいらげ、席を立つ。

「どれ、ワシやあ風呂に入るからな」

「あー、待つて、じい。ちゃんとお薬飲んで」

雛子が戸棚から薬の袋を取り出すると、”じい”は蒼い顔になつた。

「じいが悪いのか？」

「いや、大したことはないが……どうも薬は好かんなあ。こげなもんが本当に人体にいいとかねえ」

(なに子どもみたいなこと言つてんだよ)

夜季は2杯目を食べながら呆れた視線を送る。

「じーとー、ちやんつ飲まんといつまつでんよーならんとよー!」

(方言出でるぞ、方言)

「やれやれ、仕方ないのぉ」

この時ばかりは雛子の方が大人びている。いつもヘラヘラとしている”じい”が困っている様子を見て、夜季は密かに笑つた。

ג' ינואר נספחים

「ハイ、どーいたしまして」

”じい”が去つたところで、食卓を片づける。

「ねえ、三キ」

「なんだ」

食器を下げるながら、雛子が話しかける。

「ちょっと面白っこ」と教えてあげよつか。あのねえ……あたしのお母さん、つまりじいの子どもなんだけれどね、髪が白くないんだよ」

「あ？ どうしてだ？」

「んつと……カクセー遺伝ってやつなんだって。」の白髪。最初に
じいがこいつなつて、お母さんはならなくて、次のあたしがこいつなつ
たの」

空いている方の手で自分の頭を指さす。

「しかもさ、じいってハーフなんだよ」

「ハーフ？ ビニの国と？」

「アメリカの人なんだって、お母さんが。だからあたしにも8分の1ぐらいアメリカの血が流れてるってわけ」

……つぐづぐ、奇妙な一族だ。

「お前がアメリカ……ねえ」

夜季が疑わしい目で雛子の顔を見る。

「なによ」

「その割には背が低いな、と思つただけだ」

そう言われて、雛子はむつとする。

「アメリカ人だつて背が低い人はいるでしょー、それに、たつたの8分の1なんだし」

「ハイハイ……」

夜季は適当に話を切り上げ、一つの結論に達した。

(ハーフってのはウソだな。多分。正確な年齢はわからぬーが、あのジジイ、60ぐらいだろう)

思わず、小さな笑みが口元に浮かぶ。

(つてことは、ジジイが生まれたのは戦争が終わりかけた頃だろ。
……そんな時期に、アメリカ人と日本人が結婚できるわけねーだろ
ーが！)

なぞなぞを解いた子どものように優越感に浸りながら、夜季は荷物を取つて朝浦家を後にした。

第1-1章・過去からの干渉

夜季が朝浦家を出たころ、時を同じくして西条家では凛がシャワーを浴びていた。

「ふう。髪が長いと手入れが大変だな」

凛自身はもっと髪を短くしたいのだが、ファンの女子たちからの強い要望に応えて伸ばしているのだ。強く押されると断れない性分なのである。

「とりあえず脚本はできただけど……。引き受けてくれるかなあ……」

『キ』

湯船につかり、体を休めながらも脳は回転している。

「当然、キャストとして画面にでることは一番嫌がるだらうけど、かと言つてこの仕事もどうかな……？」

凛は、ある作業を夜季に任せたいと思つていた。問題は、それを本人が引き受けてくれるかどうか、である。

「とにかく明日、頼んでみるしかないか……」

窓から外を見ると、夜空には鏡のような月が浮かんでいた。

同じじいじ、月を見上げていた男がもう一人。夕紫である。

「ん……夕紫、いつ帰ってきたの……」

伊波家の台所のスミから、淀んだ声が聞こえる。

「あんた、帰つてきたらだいま、ぐらり言になさじよ……」「

と、その女性は言つたが、言つたといふで聞こえはしないだらう。泥酔して眠り込んでいた母親には。

「頭イタイ……」

口元と立ち上がり、テーブルの上の呑み酒に手を出す。

「酒の苦しみは、酒で済すのが一番ね」

夕紫はこの間、なにもしゃべらず窓から田を見ていた。やがて、チーンと電気的な音が響き、夕紫はレンジからレトルト食品を取り出す。

伊波家は、夕紫と母親の二人暮らしである。父親は夕紫が3歳の時に離婚しており、当時6歳の姉とともに本州の実家に残った。

「あの男……この間死んだんだって」

書かれた文章を読み上げる様に母親がつぶやく。この間、と言つが、父親が亡くなつたのはもう6年も前のことである。それ以来、母は口癖のようにこの言葉を繰り返している。

「バカな男だよね。からだ弱いのに働き過ぎて死ぬなんてさあ……」

夕紫は黙つて食事をする。

「ゆうじい、あんたはあんな男にならないでよね。あんたは頭がいいんだから、ヒック。誰にも、バカにされない、ヒック。立派な、男になりなさい……」

そのまま、テーブルに伏して再び眠り込んでしまった。

夕紫は、何も言わなかつた。言えなかつた。

翌日の昼休み。夜季は凛からある提案を受けた。

「美術係？」

「そう。三キにお願いしたいんだ」

生徒会室。いつもの顔ぶれである。

「スーゴさんの提案で、映画のラストシーンを少し工夫することにしたんだ。最後のライブの場面は録画を流すんじゃなくて、実際にステージの上でやるうつて」

「……また面倒なアイデア出しやがつたな

「なによ～。その方がおもしろいでしょ？」

離子が言い返すが、夜季は無視する。

「で、それがどう関係するんだ?」

「小説読んでもらえればわかるけど、この最後のライブって、室内じゃなくて夜の草原でやつてるんだよね」

「ん、ああ。そうだった……な

夜季はあやふやな反応を示す。昨日帰宅した後に続きを読んだのだが、半分眠りながら読んではいたため内容があまり頭に残っていない。

「それで、雰囲気を出すためにステージの背景として草原の絵を描いてほしいんだ」

以上が、凛の提案である。無論、この役を夜季に頼んだのには理由がある。

「三キツで、絵を描くのが得意だったよね

やつ。なにか」ともすぐに飽きててしまう夜季だが、絵、特に風景画を描くことは得意だった。

「そりゃあ、まあ……絵を描くのは嫌いじゃねえけどよ……

「んじゃ、別にいいじゃん。決定ね

雛子が例のノートを取り出してメモを取りつゝある。それに気付いた、夜季は慌てて声を挙げた。

「ま、待て！ もつ少し考えさせぬ」

「え？」

ペンを持つ雛子の手が止まる。

「どうしたの？」

「いいから。まだ決めるな」

そう言つて夜季は立ち上がり、ドアを開ける。

「ヨキ、ヨキ……」

凛が声をかけるが、夜季は構わず外に出た。

(つたく、人数が増えれば仕事もなくなつて、すんなり抜けられる
と思ったのによ。ジジイにやり返すのは別にいつでもできるし、こ
れ以上協力するなんてダリイんだよ……。なんとか理由つけて断つ
てやる)

そう思いながら、職員室の前を通りかかった時、中から出て來た
一人の生徒と目が合つた。

威嚇するように染められた金髪、肩耳だけにあるピアス穴、平均
よりも太めのガツシリとした体格。いずれも、夜季の知つているあ
る人物と一致していた。

「暮越……」

「おひ、ミキ。久しふりだな」

暮越 和真。夜季と同じ3年生で、知らぬ人のいないほど有名な不良でありながら鶴鶴高校の生徒会長でもある男だ。

「謹慎、解けたのか」

「おうよ。3か月ぶりの登校だぜ。もつとも、本格的に授業に出れるのは明日からだけよ」

暮越は3か月前に他校生とケンカし、相手に怪我を負わせて謹慎処分を受けていた。今日がその最終日だつたらしい。

「じいりでよお、ミキ」

身長は夜季よりもわずかに低いが、体格のせいで威圧感がある。

「ちよいとウワサに聞いたことがあるんだけどよ。確認したいから、話いいか?」

「……ああ」

そして、二人は屋上へ向かった……。

第1-2章・決別の時

暮越は、小学4年生の時にこの魅月町に引っ越してきた。そしてその当時から“いじめっこ”だった。自分が楽しむために人を傷つける。気に入らないことがあっても人を傷つける。彼が小学6年生の時、風邪を引いてしばらくの間学校に来ない時期があった。その間多くの生徒達は束の間の安息を楽しんだ。しかし、久しぶりに登校した暮越は、以前にも増して影が濃くなっていた。

「…………も……許さねえ…………」

そうつぶやいている姿も、何度も見かけられた。

中学生になつてから本格的に「不良」の道に入った。義務教育制度がなければ卒業も出来ないほどの出席日数。白昼堂々、仲間を連れて表通りを歩きながらタバコを吹かす姿もよく見かけられた。

一時期の間、その仲間に夜季もいた。

夜季は率先してタバコやケンカに手を出したわけではないが、一緒に学校を抜け出し、真夜中まで街中をうろつくなどということはショッちゅうだった。

暮越と夜季は、悪友として周りに認識されていた。しかし、高校に上がる際、夜季はそのグループに「飽きた」のであった。

「で？ ウワサってなんだよ。暮越」

今、二人は学校の屋上にいる。

「三キ。お前さう……ウチの副会長ヒラルんぐのせ知つてたナビ
」

ポケットに手を突つ込み、見下すよつた皿つきで暮越は言つた。

「最近、あの白髪女とも仲良くなつてゐて?」

「…?」

夜季は一瞬驚き、表情を険しくした。

「別に仲良くなんてしてねーよ。向いりから絡んできてるだけだ」

「モー。じやあよ、その白髪の企画したイベントに乗つてるつてのはじめーひつた? 話してみると、お前そこいつの家に毎日通つてゐみてえじやねえか」

暮越はフンスにもたれ、問いかめるよつて言葉を続ける。

「俺の知つ合いがよ、昨日の夜お前がその家から出していくのを見た
らしこぢら」

(……………まだ知つてゐんだ、マイシは……)

夜季は背筋に嫌な汗をかくのを感じた。

「お前も丸くなつたよなあ、三キ。昔まもつとシンシンこつたのこ
元の前も

「ナ」

「……なにが言いたい？」

羞恥なのか、怒りなのか、よくわからない感情を必死に抑えながら、夜季は聞き返した。すると、暮越はフェンスから離れ、夜季の目の前に立った。

「なに似合わねえ」とやつてんだよ。なにが文化祭を盛り上げるんだ。下らねえ」

容赦なく、言葉を吐き続ける。

「教師共どもの開催する行事で、ガキがはしゃいでるだけだらうが。なんでお前がそんなことに手を出してるんだ」

暮越の言つていることと、夜季の意見と全く同じだった。今更言われなくとも、やめよつと思つてこるといひだつた。

「どうせ、俺も……」

夜季がそう言おつとした時、暮越が次の言葉を吐いた。

「みんなそう思つてゐるぜ。どうせお前も、俺と同類じゃねーか。あんな遊びで楽しめるほど幼稚じやねえだらうがよ」

(同類……遊び……?)

しばしの間、夜季の視界に暮越の姿は入らなかつた。田は前を向いているものの、意識は別の思考に向かつていた。

(同類……傍からはそう見られているのか？ 僕は……。他の人間

からすれば、俺も「不良」の一人にすぎないってか？）

それは、とつぐにわかつているはずのことだった。自分はそう認識されている、といふことは頭ではわかつっていた。しかし、改めて暮越に言われると、なぜか知らないが抵抗を感じた。

（それに……遊びじゃねえ。確かにスーコは一見ふぞけてるよう見える。けど……なんだかんだで、現実に叶いつつある。前進している。……これは、遊びなんかじゃない。少なくともスーコやリンは本気だ）

夜季の脳裏に、雛子や凜、夕紫、壬織の姿が浮かぶ。そして、”じい”のニヤけた顔が。

「おいヨキ。聞いてんのか？」

暮越に胸倉を掴まれ、夜季の意識は現実に戻った。

「違う……」

「あ？ なんだって、ヨキ」

夜季は暮越の手を払い、視線をそらす。

「お前と一緒にするな。俺は俺だ」

「一緒にだろ - が」

「違う。俺も……アイツよりも、お前が思つてこむようなもんじやない」

そう言つて、夜季は屋上を去つて行つた。

あとに残された暮越は、しばらくの間呆けたように突つ立つていつたが、突然足を振り上げ、階段に続くドアを思い切り蹴りつけた。

ガーンと鈍い音が響くのを背中に聞きながら、夜季は生徒会室に戻つた。

「ヨキ、ヨコってたの？」

部屋に入ると、まつ先に雛子が声を掛けってきた。

「やる」

「へ？」

雛子の顔を見ながら、夜季は静かに言つた。

「やつてやるよ。美術係」

「本當ー?」

凜が驚く。半ばあきらめかけていたところだつたらしく。

「その代り、他の脇役とかはやらねーからな

「りょーかい！」

雛子がおどけて敬礼のポーズをとる。

「そんじゃ、放課後にマー君も呼んで早速撮影に取り掛かるとしますか」

「その前にキャストを決めないと。放課後、他の人たちにも集まつてもらおう」

夜季は壁に背を預け、目を瞑る。

（なんだか知らないが……暮越のやつにバカにされたまま終わりたくねえ）

とにかく、本格的に動き出した。活動も、夜季も。

そして、暮越も。この時から不穏な「なにか」を計画していたのであった……。

第1-3章・秋空を走る風

太一は、ほんの気まぐれに、狭い路地裏を覗き込んだ。そこに、なにかを見たような気がした。

「なんだろう……あれ」

昨日雨が振つてできたぬかるみの中に、なにか赤いものが見える。

（まさか……）

胸騒ぎがした太一はそれに近付き、泥の中から拾い上げる。真っ赤な布地に、金色の糸で唐草模様が描かれたそれは、見覚えがあった。

「隆二さんのバンダナ……？」

この間、汚れて洗濯していると言つていたバンダナだ。その日以降、隆二は別の真新しいバンダナを購入して頭に巻いていた。

「どうしてこんなところに？」

そして、太一は気が付いた。金の唐草の部分に、よく見ると赤いものがこびりついていた。確かめなくともわかる。紛れもなく、それは乾いた血液だった……

「ハーサイ、カット！　OKだよ、マー君」

一か月が経ち、10月の中旬。

雛子の声を聞いて、路地裏から太一に扮した有田が出てくる。

「ビーよ、今の血に驚いた表情」

「よかつたよ～。ね、みんな」

周りで待機していた他の役者たちに声をかける。

「有田先輩、驚く演技上手ですね」

「だう？　”驚きマー君”と呼んでくれ」

おびけて言つと、笑いの渦が起つた。

初めは主人公役の有田が一人だけ大学生ということで、他の役者たちもやりづらいう�だが、有田自身のキャラクターのおかげですぐに打ち解けることができた。

「そんじゃ、コース。今のシーンに、過去のイメージ挿入するのもうしくね」

了解……とは、当然言わない。夕紫の役割は、録画した映像の編集だ。元々専門の知識を持つていたわけではないが、参考書を一冊読んだだけでマスターしてしまったというのだからスゴイ。

「次はミオちゃんたちの場面か……その前に、一旦お昼ノハシの休

憩にしようか

「はーー」

生徒達が昼食を買ひに行つたり持参の弁当を広げたりする中、離子は凛と夕紫、そして有田を集める。

「はいコレ、三人のお弁当。ミオちゃんはクラスの子たちと食べるつて」

「いつもありがとう。本当にいいの？ 休日撮影の度にこんなに…」

「いいの。どうせ自分の作るんだから、ついでに」

離子は得意げに笑つてみせる。

「いやー、スーちゃんの弁当マジ美味いわ。もうこれが一番の楽しみ

早速中身をつまんだ有田が舌鼓を打つ。

「ありがと。…………そつそつ。もう一人持つて行つてあげなきゃね

「あ、僕が持つて行こつか？」

凛が提案するが、離子は首を横に振る。

「あたしが行く。アイツがちゃんと仕事してるか見なきゃいけないもんね」

そう言つて、雛子は弁当の入った手提げを持つて走り出した。

「1時までには戻るからねーっ！」

活気に満ちあふれた声を聞いて、凜は小さく微笑んだ。

「元気だね、いつも。スーコさんは」

「おまけに料理上手。こりゃあいー嫁さんになれるんじゃねえの？」

早くも有田は弁当の半分を平らげていた。

「ただ、アイツ一人だけだよな。素直に弁当受け取らないのは」

「そういう性格なんですよ。借りを作りたくないって言つてました」

雛子は弁当を気遣いつつも飛ぶように走り、やがて町はずれの農場に辿り着いた。

農場とは言つても、数年前から地主が趣面を変え、現在では牧草地帯になっている。魅月町内で最も広いこの草原に、目的の人物はいた。

「ヨキーフ！ 差し入れ持つて来たぞー！」

秋の様相を示す草花の上を、活きのいい声が滑つて行く。

「またかよ……いらねえつづつくるだろ？」

キャンバスに向かい合っていた夜季は、不機嫌そうな表情で振り返る。

「ちゃんと『ハンは食べなきゃダメでしょ。……なんだかんだ言って、いつも残さず食べるくせに……』

「なんか言つたか？」

「んーん。別に」

茶色付いた草の先が、雛子の一の腕をくすぐる。季節はすっかり秋になつてゐるが、今日は天氣がいいので活発に動き回る雛子などは半そでのTシャツ姿だ。少し長い距離を走ってきたせいで、肌が上気しているのがよくわかる。

「ねー、ヨキ。実際にステージで使うのは、もっと大きいやつに描くんでしょう？ しかも夜のシーンなのに、なんで昼間つからこんな小さいキャンバスで描いてんの？」

「リアリティを出すためには、毎間の光景も観ておいた方がいいと思つてな。それに長いこと絵筆握つてなかつたから、リハビリも兼ねてな」

夜季は渋々と弁当を広げながら話す。

「へー。なんかよくわかんないけどスゴー。こののは真剣にやつてくれんのね」

「……どうせなら出来るだけリアルな絵にしてくれって言つたのは誰だ？」

「誰やつたつけ？ リンかな。あ、もしかしてじい？」

「お前だお前！ 無理やつジジイの名前を出すな！」

顔を寄せて思いつきり嫌がつた顔を作る。

「アハハ。じいはヨキの天敵やつちやね～」

「方言出でゆうての」

気持ちのいい秋晴れの下、雛子も夜季の隣に座つて食事を始める。

「はあ～……いい天氣やねえ」

「お前、最近訛りが強くなつてきてねえか？」

夜季が指摘すると、雛子の箸がピタリと止まつた。

「そーいやあそーやねえ。今までばじいと一人きりんときか、テン
ション上がりまくった時だけやつたとこ……。最近は、夜季と一緒に
のときでん方言になつわあ」

「じーゅー生態してんだ、お前は……」

「なんよーー 人んじつを人間じゃないみたいん言つてー！」

怒るとますますひどくなる。

「ギャー、ギャー言つてねえでさつわと食べ。時間なくなるわ」

人の弁当を食いながら偉そうに言っている。二人とも食べ終わると、夜季はすぐにキャンバスに向きなおった。

「早く帰れ」

「うわーでも、ぐらぐらしたら?」

「……」

「ん、オッケー！ んじゃ、頑張ってね～」

離子は満足して、再び風のよつに走りだした。

「元気だなあ……いつもアイツは」

凛と同じことを言っているが、微妙にニュアンスが違う夜季なのであった。

「うとう、太一は決断した。隆一が眞実を言つまで何度も問い合わせる、と。しかし、以外にもあつたと隆一は答えた。

「やっぱりバレてたか……。そんな気はしてたけどな」

「あの路地裏で、なにがあつたんですか?」

緊張感のせいが、太一はまた敬語に戻つていた。

「……絡まれたんだよ。あの辺仕切つてるチンピラ共に」

「仕切つてるって……」

「そいつらが勝手にそう言つてるだけだがな。なんでも、最近売れてきた俺たちのことが気に入らねえらしい」

隆一は頬のアザに手をやる。

「気に入らなって、どうして?」

「ああいう連中つてのは、自分たち以外の人間が派手に活動することを好まない。ヤクザを氣取つてゐるのかなにからねえが、自分たちの縄張りで余計なことするな、とよ」

「そんな、それだけで暴力を!？」

「それだけで十分なのよ。アイツらは」

楽屋の突然ドアが開き、ツグミが入ってきた。

「ツグミ……聞いてたのか

「たまたま耳に入ったから。ねえ、隆一。アンタをボコしたのって、どんな奴？」

隆一はしばらく考え込み、天井を見つめながら答えた。

「確かに……金髪で、派手なグラサンかけてたな」

「そいつ、聞いたことある。そのグループのリーダーで、確か名前は……」

ツグミがその名前を言つた時、太一は目を見開いて驚いた。その名前は、小学校で太一と同じクラス、そして同じ”いじめられっこ”だった、ある生徒と同じ名前だった

「ええと、じいにやつたんかのう……」

”じい”は部屋中に散乱した試料用の書類や本をかき分けながら、あるものを探していた。

「なにせ何年も昔のメモやかいなあ。捨てた覚えはねえっちゃんど」

「ちゃんと片付けんかいよー、じい」

雛子も探すのを手伝つ。撮影はほぼ完了したのだが、ラストシーンの歌の歌詞がいまだに見つかっていないのだ。“じい”と雛子が必死にメモを探しているのだが、かれこれ3時間かかってもはからぬ。それにしても、この二人だけになると方言が丸出しになる。

「はてはて、一体じいにやつてしもうたつかや らうか

「ふええ～。見つからんなかつたらどんげしよ～。練習できる時間もあと1か月しかないとにい～」

雛子が焦つた声を出す。すると、“じい”は手を動かすのをやめてその場に座り込んだ。

「じい、どげんしたと?」

「……いつそんじつ、お前が新しく書いちみらんけ?」

「えつ……う、ウチが～つ!？」

雛子は驚くが、“じい”は平然としている。

「うん、それがいいかもなあ。昔ワシが書いたのが見つかったとしてん、今ん若えもんたちにやあ受け入れられにくいやうつ。だつたら若えもんが書いた方がいい」

「や、やけん……いいと? ウチで……」

珍しく自信のなさそうな雛子だが、自分の国語能力を知つていれば当然の反応だろう。

「あつそつだ！ リンに頼んだら作ってもらひやうかー？」

「ふーむ……それも面白やうせやけんな……。どつねやつたら、祖父の小説をもとに孫娘が作詞した、ちゅうほりがロマンティックだなあ」

「う……ロマンチック……？」

離子は少し考え込んだが、すぐに決断を出した。

「わかった。ウチが新しく作る。けん……リンに手伝ひもらひってんいい？」

「ねう。よかよか」

”じい”が嬉しそうに笑う。

「そんじや、早速学校に行つて報告してくつわー！」

ドタバタと部屋を出て行く孫の後ろ姿を見送り、”じい”はホッと息をついた。

「これでよつやくタバコが吸えるわい……。可愛い孫に副流煙吸わすわけにやあいかんかいなあ」

そのこの学校には、休日にも関わらず、作業に打ち込む男たちがいた。コンピューター室を借りて録画の編集をしている夕紫と凜、そして美術室で本番用の絵を描き始めた夜季だ。

もっとも、この中で一人だけ暇を持て余している者がいる。

「……コーリーがスゴすぎて、やることがないよ。……」

夕紫のサポートに来た凛である。なにしろ、夕紫は一度脚本を見ただけでどの部分をどう編集するのかを覚えてしまい、あとはひたすら無言で作業（これも、本を見て覚えたばかりの技術だ）するばかりである。

「壬織や衛さん、他の人たちは今日は休みだって。もう出番を終えた人たちもいるけど。メインメンバーは畠倉先生が歌詞を見つけ次第歌の練習に入るから、今のうちに休憩させておくみたいだよ」

当然、夕紫は何も言わない。黙つてパソコンの画面と向き合つている。

「ヨキの手伝いでもしたいんだけど……スーコさんに一人でやらせろって言われてるんだよね」

やがて今日の作業が終わり、データを保存したディスクを鍵の付いた保管棚にしまう。その時、ふいに夕紫は視線を入口のドアに向けた。

「？ コーリー？」

その方を見ると、ドアのガラス越しに人影が見えた。

「誰？」

凛が尋ねながらドアの方に近付き始めた途端、その人影は逃げる
ように去つて行つた。

「誰だつたんだろう……？」

部屋を出る時になつて二人は異変に気付いた。

「あれ、鍵が上手く回らない」

方向を変えて何度も試すが、鍵が使えないのだ。夕紫が鍵穴をのぞくと、中になにかがねじ込んであるようだつた。

「どうした？」

課外授業のために学校に来ていた教師がたまたま通りかかり、凛は事情を伝えた。教師は中の詰め物を出そうとするが、金属製のものをよほど強引に押しこんだらしく、取り出すのは難しい。

「ふーん。妙なイタズラをするやつがいるもんだな。そのデイスクはちゃんと棚に鍵をかけたんだろ？ だつたら大した問題じゃないな。明日にでも鍵の業者を呼んで修理してもらうから、受験生たちの課外授業の邪魔にならないよう帰りなさい」

腑に落ちないものを抱えながら、二人は夜季の様子を見に美術室に向かう。そして勉強中の教室の隣りを静かに通ろつとした時……。

「おお～い！ リーン！」

廊下の奥からバタバタと足音を立てて離子が走ってきた。

「うふっとお願い〜〜！」

「ス、スーコさん、静かに……」

「パハアッ！　うねうねうねー！」

凛の忠告も空しく、雛子は説教を喰らひつさめになつた。

第1-5章・動き出した影

数年ぶりに再会したその人物は、とても自分の知っている男だと思えなかつた。

「久しぶり。タイチ」

「ひさしひり……だね」

いつも下を向いて涙の跡が残つていたその顔には、派手なサングラスがかかっていた。クラスメートの男子がよく引っ張つていじめていた髪は、金色に染められていた。

「奇偶だよな。オレがこのグループでのし上がつてきたのと同時に、タイチも有名になつてきてんだから」

「そんな……。有名なのは僕じゃなくて……」

「そう謙遜するなつて。聞いてるぜ？あのバンドチームが売れ出したのは、お前がメンバーに入つたおかげだつてよ」

口調まで、昔とは違つてゐる。

「けどや……もう少し大人しくしてた方がいいンじゃねえか？ あんまりハヂにやりすぎると田舎わりだからよ」

（そんな！ チームのみんなはただ音楽が好きで、好きなことに一生懸命突き進んでいるだけなのに………）

「この町で暮らしたいんなら、オレ達の機嫌を損ねないようにな」

太一は、飛びだしそうになる言葉を必死に抑えてその場を去った

「ほう、それは災難だつたな」

朝浦家の2階。部屋にいるのは”じい”、凜、夕紫である。

「それにしても妙な奴だな。入口の鍵はわざわざ事前に壊してくせに、戸棚の錠にはちゃんと鍵を使つとはなしで」

「昨日、確かに棚の鍵をかけて先生に渡したんです。その後先生が職員室の鍵箱に保管していたのが、いつの間にかなくなっていたらしいです」

事件が発覚したのは、凜と夕紫が不審な人物を見かけた日の翌日だった。その日、新たに撮影したシーンを編集する為にディスクを棚から取り出そうとするが、なぜか閉めたはずの鍵が開いていた。もしやと思ってデータを確認すると、ものの見事に、中身は空っぽにされていた。

「幸い、撮影したビデオカメラの方にまだデータが残っていましたから、もう一度やり直すことはできるんですけど……」

「わざわざ鍵をいじつたり盗んだりするくせに、効果は嫌がらせ程度だな」

”じい”がそう言つと、凜の口調が重くなる。

「効果……やっぱり、僕たちの活動を邪魔することが目的だったんでしょうか」

「そうとしか考えられないだろ。もつとも、なんでこの活動を邪魔しようとしたるんかはわからんがな。それにしてもセロイのう

凜の表情が曇る。”じい”も表面上は平然としているが、少なくとも愉快ではなさそうだ。夕紫は……。夕紫の表情からは、相変わらずなにも読み取れない。

一方そのころ、学校の美術室では夜季が黙々と作業をして……いられなかつた。

「邪魔だから、早く出て行けっての」

「静かにしてるからね。もうちよつとだけ見させてよ」

パソコン室事件の犯人はわからないが、今、夜季の集中を乱している犯人はすぐにわかる。言つまでもなく雛子だ。

その理由は、数分前の雛子と夜季の会話にある。

「そんできー、音楽好きな人たちとも話しあつて、とりあえず曲の方はできたの。あの、バックの演奏ね。けど肝心の歌詞がまだできなくてさー」

「普通歌詞ができるからだろ。作曲は

「だいたいの歌詞は小説の中に書いてあるから、それをベースにしたの。けどところどころ抜けてるところがあつて、その部分をあたしが考えなきゃ なんないの」

雛子が話している間も、夜季は描きかけの絵と向き合つたままだ。

「それで、なんで俺のところに来るんだよ」

「いやこのつこや、理屈じゃなくて感覚でどうえた方がいいと思つたら。三キの絵を見たらなんか思いつくかな～って」

「せつや、お前に理屈を求めるのは無理だけども」

「じーゅー意味～？」

雛子はむつとあるが、夜季の言い分は確かだ。なにしろ毎回毎回、物事の手順がメチャクチャなのだから。

「そんなんに都合よく思い浮かぶかよ」

「やつて見なきゃ わかんないじゃん。……てかで、なんでこんなにたくせん描いてんの？」

本番に使う大きな布地には一切手がつけられておらず、代わりに大量の画用紙が周囲に散乱していた。画用紙には、いずれも夜の草原が描かれている。

「一度キャンバスでいい絵が描けたら本番に移りひとつ思つてんだけどよ。どつもこれ、てのがないんだよな」

「……全部一緒に見えるけど」

「うつせえな。静かにしていろよ」

そう言つて、夜季は絵筆を握る。

そして現在。

「あーっ！ やっぱりジロジロ見られると集中できねえ！」
「出で行け！」

「別にヨキを見るわけじゃないのに～！」

「うめえ！ まじらへんのやつ持つて行つて、いかよそで考え

夜季は散らばつていた絵を適当に拾い、雛子に押し付ける。

「どうせなら最新のやつがいいよ~」

「…」「…」「…」
「これも同じに見えるんだろ？」
「だったらどれでもいいじゃねえか

「あつそつか」

「そうかって、おい……」

……ここですぐに納得してしまつたからスゴい。夜季も拍子抜けしてしまつた。

「とにかく、邪魔だから出て行け」

「はーい。頑張ってね~」

素直に出て行く雛子の後ろ姿を見て、もはや怒つていいのか呆れていいのかわからない夜季なのであつた……。

美術室を出た雛子は、廊下である人物に出会つた。

「木崎先生、こんにちは」

「こんにちは」

昨日、凛から鍵を預かつた教師だ。

「先生、顔色悪いですよ？ 大丈夫ですか？」

雛子がそう言つと、木崎は顔をそむけた。

「あ、ああ。鍵の管理のこと、ちょっと問題があつたからな。考え方をしてたんだ」

よく見ると、木崎は冷や汗をかいているのだが、雛子は気がついていない。

「じゃ、じゃあ、先生は用事があるからこれで……」

「はい。それじゃ」

会話を切り上げ、木崎が数歩歩いたとや……。

「あ、そつ言えば先生」

「ひつー?」

雛子が再び声をかけた。木崎は明らかにビクつとして振り返る。

「お子さん、元気ですか？ 小学生でしたっけ」

「あ、ああ……。4年生だ」

「休日ぐらじ遊んであげてくださいね。それじゃー！」

今度こそ去つて行く雛子の背を見送り、木崎はため息をついたのであった……。

第16章・意志の確認

本番3週間前。昼休みの生徒会室に、いつものメンバーが集まっている。

「結局、嫌がらせはデータの消去と布地だけ?」

「そう。しかも妨害目的にしては効果が薄い。データもすぐに作り直したし、布地の件に至っては実質被害ゼロと言つてもいいぐらいなんだ」

布地とは、夜季がステージに使う背景として用意していた白い大きな布のことだ。雛子が美術室を訪れた日の翌日、夜季が美術室に行くと、その布路が引き裂かれていた。

「自然にどこかに引っかかつたって感じじゃねえ。ハサミかなにか、刃物を使つたような切り口だった」

幸い、夜季はまだキャンバスで下絵を描いている段階で、布地には一切手をつけていなかった。そのため、新しい布地さえ用意すればいいだけの被害で済んだ。

「それでも変な事件だよね。誰がやつてるんだ?」「

「唾倉先生が言つには、僕たちの活動を邪魔したい人物の犯行らしいけど……」

凛が首をかしげる。のような人物に心あたりがないからだろう。

しかし、夜季は一人だけ、その候補を知っていた。

「暮越……」

「えつ？」

夜季のつぶやきに、皆が反応する。

「暮越会長が？ パキ、どうしていつの間に？」

同じ生徒会である凛は暮越のことを「会長」と呼んでいた。

「アイツは……こいつ行事とかがキレイだからな。理由は知らないけど、中学の時から文化祭の時期が近付くとイライラして周りにハツ当たりしてた」

「は？ ハツ当たりって、そんだけでこの嫌がらせ？」

雛子がキヨトンと目を丸くする。

「スーパーさん、まだ会長だと決まったわけじゃないよ

「そうだ。よく考えてみれば、アイツにしてはやり方がセーフすぎる。アイツだったら、もつとストレートな暴力に出るはずだ」

この時の議論は、これ以上発展しなかった。

その後、歌詞も一応完成し、（そのうちの大半は凛によるものだが）夜季もよみがへ納得の出来る絵が描け、本番に取り掛かろうとしていた。

本番1週間前になり、嫌がらせの事件の事も忘れられかけたある日。ついに大きな事件が起についた。

「ヒードイ……ひどいよ……！」

発見者から報告を受け、雛子と夜季は体育館に駆けつけた。

「シャレになんねーぞ……ほとんど私物なのによ」

映画のラストシーンでのバンド演奏。そのために音楽好きの参加者たちが楽器を持ち寄つて毎日練習していたのだが、被害に遭つたのはその楽器だ。生徒達が朝の練習を終えて授業を受けている間に、体育館に置いてあつた楽器が壊されていたのだ。

「これは、修理に出してもムリだろうな」

夜季はネックと胴体が完全に分離したギターを見てつぶやく。

「そんな……なんでこんな」と……

「？　スーコ？」

いつになく、雛子の声が震えている。

「みんな、練習頑張つてたのに……そのギター、知り合いの人からもらつた大事なものだつて言つてたのに……」

「おー、スーコ……」

「ハーハーハーハー。」

夜季が声をかけると、突然雛子は体育館を走り出した。

「お、おこつー、どこ行くんだー?」

雛子は上履きで校庭に飛びだし、追つてくる夜季を振り切る勢いで校舎の後ろに回る。

「どうしたんだー? スーパー。」

夜季もすぐに校舎裏に向かうが、雛子の姿はない。周囲を見渡すと、裏口のドアが開いている。

(校舎の中に入ったか?)

迷わず、そのドアに入つて行く。

「なんだ……なんだここんなんなるひちやん…………」

雛子は、座り込んで顔を伏せる。

壊された楽器は、生徒の私物だ。自分の企画したイベントのためには、喜んで協力してくれたようだ。さすがの雛子も、この仕打ちには完全に参つっていた。

「ハア……」

大きくため息をつく。すると、その横に一人の男が立った。

「足、早すぎんだよ。スーコ」

「コキ……？ なんでココでわかったの？」

顔を上げると、息を切らせた夜季がいた。

「土の付いた上履きで廊下を走れば、足跡が残るのは当然だろ？」「

夜季は雛子の隣に腰を下ろす。

「……さすがのお前も、ショックだったか？」

「ショックに決まっちゃったやん……。みんな楽しそうに練習しちょ
つたのに、こげん田にあつなんて……」

再び顔を伏せる。

「みんなで怒るやん。ウチがこげなこつ考えたせいで、大事な楽
器壊されて……」

「……」

雛子の愚痴を、夜季は黙つて聞いていた。何も言えなかつた。

(こつが落ち込むのもわかるけどよ……。なん、つーか……こつ
いつ空氣、苦手なんだよなあ……。ジジイだったら、こんな時に上
手いこと書いて立ち直らせられるんだろうが……)

「 もへ、ムリッやあやひつか？ これ以上頑張つても、また邪魔さ
れるつちやうづか……？」

「あ？？　おい、待てよスー！」

思わず、夜季は言葉を出す。

「お前、もしかしてあきらめるつもりか？　ここまできといて」

「え……」

「さんざ人のこと巻き込んで仕事押し付けておいて、結局あきらめ
るつづーのか！？」

つい、怒鳴るような大声になってしまった。

「……」

離子は黙り込んだまま動かなくなつた。

(あ、マズい。余計落ち込ませちまつたか……?)

グズ……グズ……と、離子が鼻をすする。

(？　コイツ、もしかして泣いてんのか！？)

夜季は恐る恐る、離子の顔を覗き込む。すると……。

「グズ、ふ、ふえ、ふ……ふえーくしょん！」

「うわっ！ 汚ねえ！」

大きな、大きなくしゃみだった。

「グス……」「メン、ゴメン。最近急に寒くなつたかい……」

「お前、紛らわしいんだよー。」

今度は本当に怒鳴った。

「それはともかく、あきらめるわけないじゃん！ 」 しかも来といて、あきらめるとかあり得ないでしょー。」

「お、おひ。そうだな」

突然の剣幕に圧倒されてくる。

「ウチは落ち込む時はとことん落ち込んでつたチやかい、今はこげなこつしょる場合じやないと… ヨキ、行くよ！」

「わっ、ちょ……行くつてドコだよー！ おーい、スーコー！」

雛子は夜季の手を引いて階段を駆け下りる。

「とりあえずリン達と合流ー！ てゆーかヨキ、手え冷たーい

「冷え性なんだよ、オレは！ 危ないから手放せー！」

夜季のおかげ（？）で元気を取り戻した雛子。その姿を、おもしろくなさそうに見つめている人影があった。

第17章・迫りくる不吉

アマチュアからプロへ昇華する手段の一つに、スカウトされる、というものがある。太一の所属するバンドグループは、まさにその切符を手にしかけていた。

「来週の君たちのバンドの成果次第で、正式にうちの事務所で雇うことにする。そうすれば、晴れてプロの仲間入りだ」

スカウトに来た男の言葉で、練習に熱が入った。他の心配事は捨てて、ただ練習だけに集中した

その連絡を聞いたとき、希望は音をたてて崩れた。プロ入りが決まる大事なライブ。その会場となる特設ステージが、何者かによつて破壊されたという報せによつて

本番前日。雛子をはじめとするメンバー達は朝浦家に集合していった。ただし、いつもの2階ではない。1階のリビングだ。

「楽器壊された人たちも、一応許してくれたけど……。やっぱり責任は僕たちだよね」

「リン。その話は一旦置いといてくれ。またスクをなだめるのが面倒だ」

「うーるーちーーーーー！」

雛子が強引に遮って話を変える。

「その人たちとも話し合って、ラストシーンをどうするか考えたの。
えっと……」

「演奏は練習で録音したテープを使って、私が一人で歌うことにな
りました」

壬織が言葉を継ぐ。

「へえ。壬織のソロっ！」

「一人で歌うのは苦手ですけれど、演劇の一部だと考えればなんと
かなりそうです」

「ミオちゅんって、本当スゴいんだよー！」

雛子が声を大きくし、壬織の隣に移動する。

「撮影の時なんか完璧にキャラクターになじきつてきて、しかも他
の人たちにもビシッと演技指導なんかしてさ、オマケに歌まで上手
いんだもん~」

「あ、あの……先輩……」

雛子は壬織の腕にすがつて頭をこすりつける。

「ハタから見てるとどっちが先輩だかわからねーな……」

「」もつとも。身長も壬織の方が少し高い。

「それに加えて」の艶々の黒髪は反則でしょう」

「血漫の妹でして」

凜が笑って言つ。

「か、髪の艶なら兄さんの方が……」

「羨ましきるぞ！」「の三色兼備姉妹」

「だから姉妹じゃないつて……」

「それと才色兼備、だな。正しくは」

凛と夜季がツツコミをいれる。そして相変わらず沈着な夕紫。いつもの光景だが、一人、重要な人物が抜けている。

「それはともかく、唾倉先生の容態は？」

「んー……特にスゴい熱つてわけでもないんだけど……」

”じい”は数日前から体調を崩していた。本人の意向で病院にもいかず、医者にも診せていない。

「やっぱり一度診察してもらつた方がいいかなあ。じいは大丈夫だつて言つてたけど」

「いらん。病院なんざ、控え室で待つとる間に何をうつされるかわ

からんわ

当の本人が、2階から下りてきた。

「じい、寝てなくて大丈夫なの？」

「客が来たら出迎えにやならんだり。体つちゅうんは、適度に動かさにや弱る一方だ」

「どことなく足取りがおぼつかない。いつもの飄々とした笑みも、影が濃く感じられる。

「三十九。絵はできたんか？」

「あ、ああ。もう完成して明日の朝一で貼りに行く。下手に学校に置いとくと何されるかわからねえからな」

「そうか。そりゃあ是非見てみたいもんだな」

…と言ひながら階段を降り切つた途端…。

「う……ゴホッ、ゴホッ！」

「じい!?

「ゴホッ、ゴホッ……！」

”じい”は激しくせき込んだ。それは長く、呼吸が止まるのでは
ないかと思つほど長く続いた。

「お、おこおこ……ムツすんなよジジイ。休んでろ」

夜季が”じい”の肩を支える。

「ゴホッ……。ふ、ハハハ。ヨキ、お前さんがワシの心配をしてくれるとはなあ。天変地異の前触れか、はたまた雪でも降るか」

「笑つてゐる場合じゃねーっつの。こちに風邪つつされたくないだけだ」

夜季はそのまま”じい”を2階の部屋へ連れて行った。

「雪つて言えばも……今年は、降るかな……」

「どうだううね。例年と比べて少しあは寒くなるみたいだけど

前にも言つたかもしけないが、魅月町には雪が降らない。九州南部に位置するこの町では、せいぜい数年に一度か二度、ほんのわずかにちらつく程度である。

「見たいなあ……今年は」

「この町じやあムリだな」

夜季が2階から戻ってきた。

「それじゃ、俺はもう帰るぞ。明日早いし」

「あ、じゃあ僕たちもそろそろ」

「うん。また明日ね……」

心なしか、わざわざから雛子の声が重い。

「どーした？ 元気ねーぞ」

「え、そう？ ……大丈夫だよ、うん」

雛子に見送られ、夜季、凜、夕紫、壬織は朝浦家を出た。

「それにしても、誰なんだわ。犯人は」

「暮越ぐら」しか思いつかねえんだけどな……鍵盗んでデータ消去
なんて面倒な」とアイツはしねえはずだ」

「……少し怖いです。明日、無事に映画を公開できるか」

壬織の言つとおり、なにかしらの妨害に入る可能性は大きい。

「わけわかんねえな……。ゴーシ、お前なんか閃かねえか？」

ダメ元で聞いてみる。すると、少しの沈黙の後に夕紫が口を開いた。

「…………」

「おーい！ ハキー！」

言葉を遮つて走ってきたのは、有田だった。

「マモルさん。ビートしたんすか？」

「ハア、ハア……おい、ヤベーザ。明日の文化祭」

息を切らせながら有田は深刻な表情をつくる。

「ヤバいって……」

「明日の文化祭、お前らの学校のクレゴシとか言つ奴が仲間を集め
て暴れるんだとよ」

「暮越ーー?」

「さつきたまたま道端で不良どもが話してゐるのを聞いたんだ。祭り
をメチャクチャにしてやるとかなんとかよ……」

一回の間に、緊張の空氣が流れる。

「やつぱり……やつぱりアイツだつたのかよー」

夜季がそう叫んだ。

そして時を同じくし、学校ではある人物達が会話をしていた。

「なあ。アンタ本当にやる気あんのか? ぐだらねえ! じばっかり
しゃがつてよ」

「……」

相手の男は、何も言い返せない。ただ黙つて汗をかくばかりであ

る。

「アンタが全然ダメだからオレが余計な手間をかけるハメになつたんだ。わかつてんのか？」

「……」

「明日だ。明日、もう一度チャンスをやる。ちゃんとやらなかつたら……」

その先の言葉を、相手の男は何度も聞かされていた。全ての原因が自分にあることを知りながら。

第18章・想いを胸に秘め

暮越が仲間を集めて文化祭を妨害しようとしている。なぜ？ 具体的にどのような方法で？ 詳しいことはなにもわからない。

ともかく明日、手の空いている者で警備をしようと結論を出し、夜季達はそれぞれの家路についた。

ただ、一人。前述の謎を解いた人物がいた。言うまでもなく夕紫である。しかし、解いたといつても未だ推測の域を出ず、誰にもそれを告げなかつた。

『…………も…………許さねえ…………』

暮越は小学生の時、よくそうつぶやいていた。風邪を引いて長い間休んでいた後のことだ。その言葉が何を意味するのか、誰も知っている者はいなかつたしハツキリとは覚えていなかつた。

夕紫だけが、その言葉を鮮明に覚えていた。特に意識して聞いていたわけではないが、夕紫の卓越した記憶力はしつかりとその言葉を脳に刻み込んでいた。

「木崎、許さねえ……か」

そつづぶやいて、玄関のドアを開けた。

「壬織。明日の舞台、大丈夫？」

「ええ。……なにもなければ、ですが……」

壬織の表情が沈む。

「僕とヨキとコースそれとマモルさんに、他の手が空いている人たちにも協力してもらうからね。壬織はステージに集中していくよ」

凛が妹に励ましの言葉を贈る。もつとも、凛自身も不安を拭いきれないのだが。

「珍しく、ヨキがやる気になってくれてるんだ。唾倉先生のためにも、絶対に成功させないとね」

「唾倉先生……。そうですね、頑張ります」

「それじゃ、明日7時つすからね」

「はえーなあー。ま、学校に置いとくよか安心か」

明日の朝、夜季と有田で背景の絵を運ぶ約束をしてくる。なにしろサイズが大きいのだ。

「その暮越つてやつヨキの知り合いなんだろ？ 話し合いでビーツかなんねーか？」

「話し合いつらうか、アイツが今ビーツいるのかもわからねえ」

「あ～あ～、つたくよお」

有田は大袈裟に肩をすくめる。

「ハタチ過ぎて不良とケンカすることになるとは思わなかつたな～」

「とにかく明日、遅刻厳禁で」

「へいへい……」

（暮越……お前、なにがしたいんだ？　ただ気に入らないってだけで、こんな騒ぎになんのか？　お前……なにが、目的なんだ）

様々な想いを抱き、ついに文化祭当日を迎えた。

「じい、やつぱり寝てた方がいいよ。熱も出てきてる」

「ん……そつか？」

朝浦家の2階。離子が”じい”の看病をしている。

「残念だな……スーコの作った映画、見てみたかったが

「ビデオに録画しておひから、学校から帰つてきたら見せてあげる」

離子は時間を気にしてそわそわとし始める。

「ふうむ。楽しみに待つとるわい。それじゃ、行ってこいや

「うん、行つてきます！ 絶対、ぜーーつたい外出ちやダメやかいね～！」

慌ただしく出て行く後ろ姿を見送り、“じい”は躍りについた。

映画の上映は午後からだつたが、昼前から体育館は、満席だつた。一般的の客も招いているため、用意していたイスでは足りずに立ち見まで出でている。

「うひや～……スッゴイ人だね～」

「2階まで一杯ですよ」

控室から客席を除いた離子と王織が会話している。

「これも、ヒロイン役のミオちゃんの美貌のおかげかねえ……」

「えっ、こやそんな……。原作者が畠倉先生だからですよ」

「お～い、ちょっとといいか？」

ドアをノックしながら声を掛けってきたのは、有田だ。

「マー君？ 入つていーよ」

有田が入つてくる。その後ろに、大学生と思わしき集団がいる。

「あ、コイツらはオレの大学の後輩。勝手について来てるだけだから気にしないで」

「勝手について……プロデューサーに会わせてやるからついて来いつて言つたじゃないですか」

一人の女子大生が口を尖らせる。

「ああ悪い、悪い、犬飼。」——ゆー口ねつてよ、見せびらかしたくなるんだよな」

「初めまして。プロデューサーの朝浦スーコです」

有田を無視してあこがれつをする。

……スゲエ髪……。バカ、言つなよそんなこと。という声が集団の中から聞こえてくる。

「ひづらが、ヒロイソンのミオちゃん」

「壬纖です」

おお～美人。きれい～。といつ反応。

(あり？ なんかウチがあいさつした時と反応が違う……)

雛子が内心カチンとしたのを見抜いてか、有田が口を開く。

「やうそ、本題本題。スーパーちゃん、ヨーシ見てない？」

「コーチ? わあ……朝ちょっと見かけたけど……。今はどこの知らない」

「私も、伊波先輩は見てないですね」

「うーん……。今から警備の打ち合わせの確認でもしようかなって思つてるんだけど、見当たらんじんだよなあ」

有田は困ったように腕を組む。

「コーチのことがひかわ、確認しなくてもひかわとわかつてゐる感じがない?」

「それが、そつかもな。そんじゃ、俺も警備に行くから後はよろしくな。……オフ、お前らも警備手伝え」

えへー!? 聞いてないですよ~。と、ブーリングが起ける。

「うるせえな。ちゃんと映画が見れる位置での警備割り当ててるからよ」

ざわつきの余韻を残し、大学生の集団は出て行った。

「わへ、し……?」

「ん? どうかしたか、犬飼」

「いえ、別に」

一方そのころ、すでに警備についていた夜季と凜も夕紫の不在に気がついていた。しかし。

「コースのことでだから、問題ないと済つよ

「心配いらねえな。それより、オレ絵を描くのが忙しかったから、まだ一度も映画観てないんだよなあ……」

「残念だけど、安心して見れる状況じゃなさそうだね

「いつもほんこやかな凜も今日は表情が険しい。

「せめてお客様たちが安心できるようこ、元気にならね
なくひやね

「やうだな

開演一時間前。陰謀との対決の時は、確実に迫って来ている……。

第18章・想いを胸に秘め（後書き）

犬飼については、【騎行の風】を参照ください。

第1-9章・剥き玉された所

「ふう。……それにしてもヒマだのう」

”じい”は煎餅布団に横たわったままつぶやいた。

「まさかこんな時に寝込むはめになるとは。生のステージで見られないのが残念だ」

時計を見る。上映の一時間前だ。

「……前々から覚悟はしておったが、予想よりも早く来たな……」

蒲団から腕を出し、自分の額に触れる。高熱だ。おそらく40度近い熱が出ているだらう。それでいて鏡を見ると、顔面蒼白になつている。

「ふつ……ワシももう若はないか

鏡に映った顔が、わずかに笑つた。

上映10分前。

「いよいよだね」

「ああ。……クソッ何も起こらないのが逆に不気味だぜ」

夜季は腹だたそうにつま先で床を蹴る。

「機材は朝からずっと交替で見張つてたから無事だし、夜季の絵もすでにステージ上に飾られてる。暮越会長……何をする気なんだろう」

「知るか、あんなやつの考えなんかよ。……リン、ちょっとトイレ行つてくる」

「あ、うん。わかった。僕もそろそろ持ち場に戻るよ」

「室内を暗くするために張られた暗幕の裏を通り、夜季は外に出た。

「トイレっつてもあんまり遠くに離れるわけにはいかねえな。あそこ使うか」

そこは、普段人の立ち入ることのない古びた小屋だった。もともとは卓球部の練習場として建てられたものだが、数年前に廃部になつて以来利用者がいなくなり、今では廃屋同然になつている。一応、そこにはトイレもある。

「カビくせぇけど、ここが一番近いからな」

急いで用を済ませ、洗面所で手を洗う。

(暮越の野郎……今頃どこでなにやつてんだ?)

その疑問は、顔をあげてひび割れた鏡を見ることですぐに解決した。そして夜季は真横に跳んだ。

直後に、振り下ろされた何かが空を切った。

「……久しぶりのあこさつが右拳かよ」

「口より先に手が出る性分なんであ、俺は」

わう言ひて、暮越は一ヤリと笑つた。

「なにやつてんだよ、暮越。ここで俺をボコして何の意味があるってんだ?」

視線は暮越に向けたまま、夜季はじりじりと下がつて隣の卓球室に移動する。

「別にお前だけが目的じゃねえよ。ただ、お前が早めにいなくなつてくれると後が楽になるんでなあ。なにせ元不良だからケンカも慣れてるしよ」

(ケンカ……つてことは、やっぱり暴力で妨害するつもりか)

「どうせやるんならよ、思いつきり恥かかせるぐらこのつもりぢやらねえと面白くないだろ? あの白髪女によ

素早く視線を動かし、他に暮越の仲間がいないことを確認する。

「スーゴー?……?」

「そいつ、つーよりもお前ら全員だな。こんな下らない行事なんかで騒いでるヤツら、全員」

長い間放置されていた空間に、一人の男が向き合って立つ。

「お前が何かやらかすつもりならよー……それを防ぐのが今の俺の役割なんだよな」

「役割？ ハツ！ お前、すっかり犬だな。あの白髪の言いなりになる犬だ」

暮越は口元に下卑た笑みを浮かべるが、田は笑っていない。

「……わざと終わらせるぞ。上映まであと5分しかない」

「おいおいおい……。本当にあんな下らないもんが見たいのかよ。いい子ちゃんになりやがつてよ」

(下りない……まだ言つか)

夜季の田は中学時代に戻っていた。そして、かつて背中を預け合っていた男に向けて鬪気を発した。

「えー、この映画はみなさん御存知の小説・『神の唄う街』を限りなく原作に近い形で実写化したものであります……」
暗く閉め切った体育館の檀上で、雛子が上映前のおいさつをしている。

「……スーコ先輩、本当に暗記出来たんでしょうか……」

控室で一人待機している壬織も、今はそつちの方を心配している。

「えーと、そんで……本を読むのが苦手で、まだこの小説を読んだことがないという人たちにも是非この素晴らしさを広めたいと思い、企画させていただいたジダイで……ジ……事態?」

(いたいた次第です、しだい…)

心の中でシッ 「むが、当然離子には届かない。

「えー…… わせていただきました」

(最初からそつちに言えばよかつたんじゃないですか……)

呆れてため息をつくと、コン、コンとドアをノックする音がした。ステージに続くドアではない。直接外に出られる非常口だ。

「あの~、木崎だけど……。西条壬織君、いるかな?」

紛れもなく、教師の木崎だ。聞を聞いて、壬織が答へる。

「はい、私です」

「ああ、ちよつとよかっただ。来年の進路のこと話があるんだけど……」

壬織は不審に思った。なぜ、こんな時に? と。

「ちよつとした確認だから、すぐに終わる。外に出ててくれ

ないかな」

「……わかりました」

舞台上に出る衣装の姿で非常口を開けると、確かに木崎がいた。

「なんでしょう」

「ソレじゃあむしろ靴履いて来てもらつていーかな」

少しサイズが小さい靴を履きながら、思考を巡らせる。

(……この状況、危険……)

それでも一応従い、木崎の後について体育館の裏に回った。そして木崎はピタリと足を止め、振り返った。

「西条君……」

「なんですか、先生」

「ゴメンね」

そう言つて、長袖の衣装の上から細い腕を掴んだ。

第20章・飽くなき怨恨

まだ、どちらも動かない。誰かが勝手に出してそのままにしていたらしい卓球台を挟んで、夜季と暮越は向かい合つている。

(マズイな……。暮越とやつ合つといひも無事じやすまねえ)

夜季としては、出来る限り殴り合つは避けたことひだつた。そもそも、なぜ暮越が自分たちを狙つてしているのかさえわからないのだから。

(話し合いで解決……か。ダメ元で聞いてみつかな)

硬く身構えたまま口を開く。

「暮越……なんで」

しかし、最後まで言い切ることはできなかつた。暮越の手から卓球のラケットが放たれたからである。今まで背中に隠し持つっていたらしい。

ガン、と鈍い音がして、ラケットが壁に当たる。

「ん~? なんだつて、四キ」

暮越が一ヤ一ヤと笑つてゐるのを見ると、初めから当つてゐつもつはなかつたようだ。

「早く殴りかかつて来いよ。チンタラしてねーで」

一步、暮越が距離を詰める。

「理由が……わからない」

「あ？」

「なんでお前が俺たちにしつつかつかつてくんのか？ それがわからねーまま終わりたくない」

夜季は動かない。『』で退いては、精神的に追い詰められてしまう。

「理由ねえ……。それを言わねえとお前が本気にならねえってんなら、話すしかねえな」

暮越和真の過去。

暮越は小学4年生になるまで、九州北部の都市に住んでいた。当時の暮越はまだ”いじめっこ”ではなく、ごく普通の少年だった。

そんな彼が、最も心配していたことがある。それは2つ下の弟のことだった。

「弟の名前はよお、……タイチってんだ」

「タイチ？」

聞き覚えがある。”じい”こと畠倉浪才の書いた小説で、今まさ

しへ上映中の映画『神の唄う街』の主人公と同じ名前だ。

「IJの名前のせいで……タイチはいじめられていた」

この本のタイチは、いじめられたおかげで有名になれたんだぞ。お前も、いじめられたら将来有名になるんじゃない？

子どもらしい、安直な発想がいじめの種だった。タイチは兄と違つて気が弱く、いつも怯えているばかりだった。

「そんな弟をかばうのが、俺の役割だったんだよ」

タイチに暴力を振るうものは、暮越によつて数倍の痛手を返された。それが兄として出来る精一杯の防衛措置だった。

しかし、その行為は結果として最悪の結末を迎えた。

子どもの心理は複雑なもので、暮越によつて報復を受けた者はますますタイチに向けて怒りを募らせた。

自分は弱いくせに、兄貴が強いからって偉そうにしゃがつて。

実際には、タイチはただ普通に生活しているだけだったが、“いじめっこ”達にはそうは見えなかつた。そして、高まつたストレスを発散するためにやり口を変えた。

「ある冬のことだ。俺が学校から帰つた時、タイチはまだ帰つていなかつた。不思議に思つて弟を探しに町に出た。そして……」

タイチは、半ば凍りついた池の中にいた。

いじめっこ達は、「誰がやったかわからないように、事故に見せかけて」タイチを凍つた池に向かって突き飛ばしたのだ。予定では、タイチが氷の上で転び、起き上がる前に逃げ去るつもりだった。しかし、タイチの体が氷の上に乗った途端、氷が砕けた。

バギン、音を立て、割れた氷の隙間にタイチは落ちたのだ。いじめっこ達はこの時すでに逃げ出しており、氷の砕けた音は聞こえていたがそのまま走り去ってしまった。

「俺がタイチを見つけたとき、まだ息はあった。すぐに救急車を呼んだおかげで命は助かった。だが、精神的な恐怖のせい……」

重い風邪が治った後も、タイチは極端に液体を恐れ、コップの水すら口に飲もうとしないようになった。そして同時に人間不信にまで陥ってしまい、普通の学校生活を送る事は困難になった。

暮越が最初に行つたこと。それは弟を氷の池に突き落した犯人を突き止めることがある。そのことを最も恐れたのは当のいじめっこ達ではなく、暮越の両親、そして教師だつた。

「和真はきっと犯人に報復するつもりだ。これ以上事件を大きくしたら、タイチにますます災難が降りかかるかもしれない」

そして、両親と学校の行動は素早かつた。犯人を突き止める前に、暮越を遠いところへ飛ばすことにしたのだ。そうして、暮越は荒んだ心のまま、親戚の住む魅月町へ引っ越してきた。

「俺は許せなかつた。おやじを、おふくろを、そして先公どもを。人が一人死にかけたつてのに、事故で済ませやがつた」

「……」

暮越が大人や社会を嫌う理由がそれだった。

「こつちに越してからも、色々と手を尽くして犯人を探ろうとした。だが、小学生の俺には不可能なことだった」

社会に対する苛立ちと自分の無力さが、暮越を非行に走らせていたのだ。

「だが小6の時、ふと思いついた。本当に犯人はわかっていないのか？　てな」

「……？」

一瞬、夜季には暮越の言っていることが理解できなかつた。

「これだけの騒ぎになつて、犯人が一人も名乗りをあげないってのはおかしい。先公どもは、犯人を知つて隠していたんじゃねえか？」そう思つて、おれはこつそり前の町に戻つて調査をはじめた

「風邪を引いたと言つて学校を休んでた時だな」

「そうだ。そしてわかつた。犯人の一人が、ある教師に自白していなことがな。だが、その教師はそれを隠ぺいした。他の教師たちにも伝えず、自分の胸にしまつていやがつた」

暮越の額に血管が浮き出る。肩を震わせ、怒りにわなないでいる。

「問題を大きくしたくなかったんだろうな。そいつはよお。『事件』じゃなく『事故』で済ませたかったんだ。……そいつのおかげで、タイチを突き落したやつらは今も平然と暮らしてやがる」

暮越の復讐の矛先は、その教師に向いた。突き落した張本人を突き止めることはできなかつたが、事件を覆い隠そうとした教師も同等の悪人だつた。

「だが、そいつはすでにその学校に転勤していた。俺はまたもターゲットを見失つて、半ば復讐を諦めかけていた。……ところが今年、そいつはこの学校に転勤した」

「今年……？　ま、まさか、その教師つてのは………」

「ゴメンね、西条君」

木崎は、腕を掴んだまま言った。

「こうしないと僕の身が危ないんだ。君には罪はないけど、生贊になつてもらうよ」

あらかじめ待ち受けていたらしく、草陰から数人の男たちが現れた。いずれも暮越の仲間だ。

「君がステージに立たないとこの映画は完成しないんだよね？　しばらく大人しくしてもらうよ」

顔中に汗を浮かべ、震える声で木崎は言った。

「木崎の野郎、俺のことをするつかり忘れてたんだよなあ、最初は。ショウがねえから」つちから名乗つてやつた。そしたら急にビクビクしだしてよお……」「

暮越が歪んだ笑みを浮かべる。

「俺はあいつに言つてやつたんだ。犯人のことはもうどうでもいい。ただし、俺があんたに怒りを持っているのは確かだつてな。そしてあいつに小学生の娘がいると知つた時、今度はこいつ言つた

「俺の弟に起こつた事件が娘さんにも起こらなければいいですねつて言われたんだ」

木崎は空いた方の手で汗を拭う。

「僕は彼の言つことをきかぬきやならないんだ。あの時、僕が事件を隠したせいで彼が荒れてしまつたんだからね。君には本当に悪いと思つけど……娘には代えられない」

腕をつかんでいる木崎の手が震えている。不良のつちの一人が歩み出て、見下すように言った。

「呼び出し御苦労だな、センセー。……西条つづつたつけっちょーつとの間、つきあつてもうぢゃ」

そして、少女の肩に手をかけようとした。

「あいつは俺のいいなりさ！ なんでもやつてくれるぜ。……もつとも、最初のうちは役立たずだったけどな」

「最初？」

夜季は聞き返すが、暮越はそれには答えない。

「俺が謹慎開けて学校に来た時、そう、お前と久々に再開した時だ。俺は二つの情報を耳に入れた」

また一步、暮越が前に出る。夜季との間にある卓球台に足をかけ、その上に乗った。高い視点から見下しながら言葉を続ける。

「俺の弟がいじめられるようになつた原因の『神の唄う街』が映画化されるといつこと。もう一つは……その映画に木崎、そして……ヨキ、てめえが絡んでるつてことだ！」

狭い室内にビリビリと怒号が響く。

「俺が……？」

圧倒されないよう、下腹に力を込める。

「タイチはあの小説のせいで死にかけた！ それを誤魔化して事故で済ませようとした木崎がその映画化を許可しやがった！ それだけでも俺がキレるには十分だが、よりによつてお前まで関わってい

やがつた

「前も言つたが、なぜ、俺だと氣にくわないんだ」

「お前も『みんなで仲良くなんてタマジヤねえだらうが』。一緒にこの文化祭をぶつ壊す手助けしてくれるかと思えば、逆に向こいつにつきやがつて！」

暮越の足が進む。古い卓球台がギシギシと悲鳴を上げる。

「だから俺は木崎に命令した！　この企画をぶち壊せつてな！　だが、あの野郎は本当にクズだ。度胸がないからイタズラ程度のことしかできねえ」

「イタズラ……最初の一いつの事件はあいつの仕業か」

データの消去と、布地の裁断のことである。

「やつだ。アイツに出来るのはせいぜいその程度だった。だから、次は俺自らがやつた」

「楽器を壊したのはお前だな」

夜季は拳を固める。二人の距離は3メートル。

「……お前達がさつわと諦めてくれりやあ、あんなことしないで済んだのによ。そして……木崎には今日もう一度チャンスを『与えた』

また一步。距離2メートル強。

「なにをやられた?」「

「ヒロインの女を外に連れ出させて命令した。そしたら俺の仲間がそいつを拉致つて、映画のラストシーンは完成しないことになる」

距離、一メートル半。

「残念だつたなあ、ヨキ? 珍しくお前がマジメに頑張つたってのは、これで全部台無しだ。今頃もつ……」

「残念なのは」

夜季が言葉を遮つた。

「残念なのはお前の方だ。……リンの妹に手を出しつづく」と
ぐらぐら、とっくにお見通しなんだよ。俺たちは「

「あ?」

暮越の表情が変わつた。意表を突かれたように目を丸めている。

「幸い、うちのリーダーは妙な発想の持ち主でな。今回もメチャクチヤな対策を講じてくれた。お前の計画は失敗だ」

「なんだ、どうこうことだ!…」

「うげつ…?」「

茶髪の不良が、うめき声をあげて倒れた。

「えつ……？ な、なにが……」

木崎には自分の目が信じられなかつた。自分に片腕を掴まれている少女が、突然茶髪のアゴを殴り飛ばしたのだ。茶髪はそのまま起き上がりなかつた。

「な、なんで女子にこんな力が……」

「気をつけてください。僕、これでも空手の経験がありますから」

女子ではなかつた。木崎が連れてきたのは……

「り、凛君！？」

メガネを外して髪をほじき、スペアの衣装を着た凛だつた。

「よほど気が動転していたようですね。よく観察していればすぐにわかつたはずですよ。控え室で先生に返事を返したのは確かに壬織でしたけど、実際に出てきたのは『身代わり』役の僕です」

そう話している間に、残りの不良3人が凛と木崎を囲む。

「スーコさんの提案は本当に面白いですね。まさか本当に女装させられるハメになるとは……」

「なにゴチャゴチャ言つてやがんだ！」

一人が怒鳴り、殴りかかわりとして一步踏み出した。そして飛ん

だ。

「……え？」

気が付いたとき、その男は地面にしたたか腰を打ちつけていた。
誰かに投げ飛ばされたのだ。

「助かったよ。ユーシー」

凛がその人物に声をかける。

「なついつの間に……」

そう言つた別の男が、今度は草むらの中に投げ込まれた。

「君は……夕紫君……」

「ユーシーって本当にスゴイですね。勉強だけじゃなく、体育で習つた柔道も完璧ですから」

凛はメガネをかけながら微笑む。

「それに、先生が怪しげって最初に気付いたのは彼なんですよ。先生が控え室に来る直前に彼がやつて来て、ここにこの人たちが待機していることを教えてくれたんです」

夕紫は相変わらずの無表情で、残つた最後の一人に視線を向ける。

「ぐつ……ちくしょう! 女をさらうだけの楽な遊びだと思つてたのに、やつてられるか!」

最後の男はそう言い捨てて逃げ去った。後には、木崎と凜、夕紫だけが残った。

「ちなみに、壬織は今大学生の方々が護衛してくださつてますからご心配なく」

凜と夕紫の勝利だ。

夕紫は、暮越の昔の言葉から推理の糸口をつかみ、暮越が転向していく前の学校に木崎がいたことやそこで弟にトラブルがあつたことを調べ、暮越と木崎の間に深い因縁があつたのではないかと想像した。

その証拠を得るため、夕紫は早朝から木崎を尾行していた。そして、暮越と打ち合わせの確認をしている現場を目撃したのだ。

「先生。……暮越君と、なにがあつたんです？　未遂に終わつたとは言え、僕の妹に危険が及ぶようなことをするなんて……。全て話してもらいますよ」

凜の声は決して荒いものではなかつたが、木崎は心に冷たい杭を打たれたようだつた。

第22章・賢者が愚者が

木崎は全てを話した。データの消去や布地の裁断も認めた。

「僕が……僕が犯人をかばったのは悪いことだつたんだろうか……。
全てを明るみにしていればよかつたのかな……」

全身から冷や汗が吹き出している。地面にしゃがみ込んだ木崎の
声はすでに”懺悔”のそれになっている。

「どうすれば……僕はどうすればよかつたんだら?」

「先生」

凜が口を開く。

「僕は直接その場にいなかつたから偉そうなことは言えませんけど
……。その暮越会長の弟を突き落した人たちだって、未来のある子
ども達です。その子たちへの報復を避けようとしたこと自体はよ
うと思います。でも……」

「手段を違えた」
たが

言葉を継いだのは夕紫だった。

「手段……」

木崎は許しを乞つようと一人を見上げる。

「暮越会長を遠ざけても、その場じのぎにしかなりません。その場でキッチリと問題を解決するべきでした」

「……」

木崎は立ち上がり、背を向ける。

「解決……」

フランフランとした足取りで木崎はその場を去る。すると、

「先生。今回のことには、僕たちは他の誰にも言いません。あなたも被害者ですか？」

凛の言葉には反応せず、木崎はそのまま校舎の向こうに消え去った。角を曲がる瞬間、凛は木崎の口がかすかに動いているのを見た。

ポン、と夕紫が凛の肩に手を置く。

「わかったよ。コーチ」

凛はつむいで独り言のよつよづやく。

「先生が最後に言ったこと、『それができれば……』だよね。ちゃんと解決するべきだなんて言つたけど、僕だって、実際にその場にいたらどうすればいいかわからなじよ」

夕紫は黙つてうなずく。

「先生つて難しいね。たくさん生徒がいて、一人一人個性や価値観

があるんだから。『 』たちの言い分もわかるけど、あっちの将来も大事だ』って板挟みになつて……。先生だって人間なんだから、いつも正しい判断が出来るとは限らないよね』

ザアア……と木の葉が揺れる。風が吹いてきたようだ。

凜は顔をあげ、わざと明るい口調で言つた。

「戻りうか、ユーシ。いつまでも女装してるわけにはいかないし」

女物の衣装をのすそを握つて凜が笑うと、夕紫も笑つた……のか
かもしれない。

もう一つの戦いは、まだ続いていた。

「対策が出来てる? どういふことだ

「教えねーよ」

夜季のすぐ後ろは壁だ。暮越は台の縁、ギリギリに立ち、一人はすでに手を伸ばせば届きそうな距離になつていた。

暮越の拳は固く握られ、全身から怒りが溢れ出ている。ギリギリと歯をしづする音をえ聞こえてくる。

「お前は失敗した。俺たちの勝ちだ」

夜季が言ったと同時に、暮越が動いた。

「ひみせえつー！」

ほぼ真上から、硬い拳が振り下ろされる。夜季は両腕でガードするが、重い打撃を受けて痺れが走る。

次に飛んできたのは右足だつた。

「ぐつ……ー」

夜季は右に飛んでかるづじて交わし、3歩離れるが、体勢を崩して膝をついてしまった。

ギシッと今にも裂けそうに台が唸り、暮越が飛び降りた。その瞬間、夜季はクラウチングスタートを切るように素早く起き上がり、ストレートを放つ。が、それは暮越の太い腕に防がれた。

「こんなもんかよ……ヨキ」

その言葉と同時に、強烈なタックルが夜季を襲つた。

「う……グウ……」

ヒード倒れでは連続して打撃を受けてしまう。そう判断した夜季は反動に逆らわずタン、タンと後ろに下がつた。運動神経はいいものの、細身の夜季と巨漢の暮越とで接近戦になると分が悪い。

「体、なまつてんじやあねえーかあ、ヨキ」

自分が上手だと確信した暮越は余裕の笑みを浮かべる。

「暮越……てめえ、どうするつもりだ？ お前の計画は失敗だ！
こじで俺と殴り合つてなんになるつてんだ！？」

「口を開くな！ こじまで来て引きさがれるか！」

暮越が再び突進の構えをとる。夜季もすぐに対応して身構えるが、一瞬、視界の隅になにかが入った。

(……?)

暮越の後ろの壁。その壁には人が出入りできる程の大きさの窓があり、そのガラスの向こうにある人物がいた。

「ど、見てやがんだ？ ヨキ」

「ジジイ……」

窓のすぐ外にいたのは、高熱で寝込んでいるはずの”じい”だつた。

「ふん、ようやく気付いたか。先刻からこじで見とつたんだがな」

「ああ？ 誰だ？ こじのジジイ」

暮越も振り返り、和服の老人を睨みつける。

「あんた……外出られるのかよ。風邪治つたのか？」

「「うるせえぞ！ パキ」

暮越が言葉を遮る。

「ジジイ、何者かつて聞いてんだ！」

ハツ、と夜季は氣付いた。

(見ていたつて、いつからだ？ まさか、さつきの暮越の話を聞いていたとしたら……)

「答えろ！ ジジイ！」

「何度も言わんでも聞こえども」

”じい”はいつもの人を見下したような笑みを浮かべている。

(ジジイのあの性格なら……マズイ！)

「ワシはなあ……」

夜季は叫んだ。

「やめろー。余計なこと書くなー！」

が、手おくれだつた。”じい”は全て聞いていたのだ。

「ワシは畠倉浪才。『神の唄う街』を書いたものだ」

「あぐ……り？ 畠倉だとー？」

(バカやうひー！)

夜季は顔から血の気が引くのを感じた。

暮越の弟がいじめられるきっかけは、畠倉浪才の小説である。いわば、暮越にとって全ての元凶　その本人が、自ら名乗つたのだ。

「……お前の、お前の小説のせいで……」

暮越の額に再び血管が浮き出る。鼻息が荒く、もはや夜季のことを眼中にない。

「お前のせいでタイチが！」

「逃げろー、ジジイー！」

その声よりも早く、暮越の拳が窓のガラスを破った。

第23章・傷と涙を背負いて進め

ガシャアーンと、ガラスに穴が開いた。

「うおおおおつー！」

手の皮が破けて血がにじみ出るが、構わずに続けて2度、3度拳を振るひ。

「やめろつ暮越！」

夜季の言葉も届かず、暮越は窓の外の”じい”だけを見ている。そして、一人の間を隔てる障害物はなくなつた。

「お前のせいだタイチが！」

暮越は窓の縁に足をかけ、外に飛び出した。

”じい”は深海の底のような瞳でじっと田の前の男を見つめているだけだった。

「消えやがれ……」

一步踏み込もうとした暮越が、突然のけぞつた。背骨に、卓球のラケットが叩きつけられていた。先ほど暮越自身が壁に投げつけたラケットだ。

「邪魔すんな！　ヨキ！」

振り返った暮越の顔面に肘が入った。

夜季が素早く足を払い、散らばったガラスの破片の上に一人は倒れてもつれあつた。

「余計な邪魔してんじゃねーぞ、ヨキイ！」

「先に邪魔してきたのはてめーだろうが！」

制服が裂け、全身に細かい切り傷ができるても夜季はひるまない。口で暮越を放すわけにはいかない。

「なにやつてんだジジイ！ もう逃げろよー！」

暮越を必死に抑え込みながら叫ぶ。しかし、”じい”は動かず、口を開いた。

「暮越よ……」

しわがれてはいるが、重い声だ。

「ワシのことが憎いか？」

「あ……当たり前だ！」

憤怒の形相で暮越が返す。

「お前が書いた小説のせいで……」

「それなら簡単だ」

”じい”は平然と言い放った。

「憎め。ワシのひととひとん憎んでしまひつて構わん」

「な、なに言つてんだ！？ ジジイ！」

「アキ。そいつを放してやれ。……全ての始まりがワシにあるのなら、終わりもまたワシで済ませ」

「な……！？」

あつけに取られ、夜季の力が緩む。

「そん代わり、他の連中には手え出すな。ワシのひとはこゝへり殴つても構わん」

自分が犠牲になるつもりだ。

「バカなこと言つな！ アンタ、体が弱つてんだろー？」

「うおおおおおおおー！」

突然、暮越が動いた。

説得に夢中になつていた夜季を強引に引き離し、”じい”的胸倉をつかむ。

「しまつ……」

「いいんだな？ 容赦しねえぞー！」

「……おつ。 やれ

暮越の拳が振り上げられる。

「死ね！ 雪倉浪才！」

「やめろー！」

バキッ！

夜季は”じい”を突き飛ばし、代わりに暮越の拳を受けた。”じい”は衝撃で芝の上に倒れる。

「うっく……。 邪魔立てするな、ヨキ」

倒れたまま顔をあげ、”じい”が言った。しかし、夜季は暮越の前に立ちふさがったまま動かない。

「じきやがれ、ヨキ。 僕もお前には用がない

「……ワシ一人やられれば済む問題だ。これ以上お前さんは苦しまんでいい」

暮越と”じい”が代わる代わる声をかける。だが、それでも夜季は退かない。

「バカ野郎、ジジイ！ アンタがやられて解決だあ？ フザケんな

「！」

「なに……？」

いつもの逆だ。夜季の剣幕に、”じい”が押されている。

「アンタがやられれば、スーコが泣くぞ！ 悲しむぞ！」

「スーコが……」

雛子の名が出た途端、”じい”的が大きく開かれた。

「あいつ、昨日からずっとアンタのこと心配してたんだ。表面上は明るく振舞つてたが、今この瞬間もアンタのことを考えている。」

「……」

「今日の映画を成功させで、アンタに笑顔で報告する。それがスーコの望みだ。それを……それをアンタが台無しにするつもりか！？」

「つ……！」

「すつこんでる、ジジイ。……『イシの恨みは俺が引き受け』る

夜季は改めて暮越の手を睨みつける。

「てめえが……？」

「暮越。」のジジイの分も含めて、全部、俺が引き受けた。」

言にながら、地面につまずを吐く。唇が切れたせいか、薄く血が滲んでいる。

「お前、もう訳わかんねえんだろ？ 恨みや憎しみ……思い通りにことが進まない苛立ち。色々ありすぎて、どにぶつけていいかわからねえんだ。だから、さつき俺に全てを話したんだひ？」

「……」

「俺も……俺もお前も……もう疲れたろう？ もう何も考えたくねえ」

暮越も”じい”も、夜季の言葉を黙つて聞いている。

「うひからば、何も難しい」とはない。俺がお前の怒りの対象だ。お前は俺だけを憎め」

「何を言つてゐるー？ ハキ、それではワシと回じ……」

「ただしー」

”じい”的反論を、力強く遮る。

「俺もただの犠牲になるつもりはない。……暮越。どんな理由があるといふと、お前は俺たちの努力を踏みにじりとした悪だ。俺はお前を許さない」

「……」

「最後の決着だ。これで……」

夜季は再び戦闘の構えをとり、暮越を見据える。

「決着か……」

暮越もまた、拳を固める。

一瞬、”じい”には暮越が笑っているように見えた。長い、長い呪縛から解放されたような笑みが。

「いぐぞヨキイイ！」

同時に動いた。そしてどちらも防御しなかつた。ただひたすら拳を相手に叩きつけることだけに集中していた。鼻血が出て、切り傷が開いても、構わずに殴り続けた。

そして……暮越は泣いていた。

怒りなのか、悲しみなのか……喜びなのか。よくわからない熱情が込み上げ、涙の粒になつてあふれ出ていた。泣いたまま、闘つていた。

「おおおおおーー！」

夜季のストレートが、文字通り真っすぐに暮越の顎を射抜いた。食いしばった歯がきしむ音を立て、暮越は後ろに傾いた。

「あつ……ぐあ……」

そして、ゆっくりと巨体が地に倒れた。

「ハア、ハア……」

夜季も今にも倒れそうなほどハリツヒていた。それでもしつかりと足を奮い立たせた。

「暮越」

「ぐつハ……ヨキイ……」

倒れたまま暮越は口を開いた。その顔からは憤怒の表情が消えていた。

重かつたる……俺の恨みの籠つたパンチはよお

「ああ。重かつた」

それを……お前は全部受け止めた。俺の怒りを……ぜん、い

遠くで鐘が鳴る。

「3時か……映画、そろそろ終わりだな」

暮越は涙を隠そうともせずに言ひつ。

「もつたいねえことしたな……俺たち。
：タイチが活躍する映画をよ」
映画見損なつちまた。

「……」

「ヨキ、最後に一つだけ聞いていいか？お前……映画やつて、
……楽しかったか？」

「……」

「どうなんだ」

「ああ。楽しかった。悪ふつてたじりより、ずっとな

夜季がそう答えると、暮越は田を開じた。

「せつか……」

笑っていた。歪んだ笑みではない。爽やかな風が心の中を吹き渡
つている。

「ジジイ。」止ま到来たら、せめて俺の躊躇りを見て行け

「……やつするかの」

”じい”は立ち上がり、夜季とともに歩きだす。

その一人の背中に、暮越は小さくつぶやく。

「……ありがとな」

夜季は振り返らず、右手の親指を立てて見せた。

第24章・もう一つの災い

誰も、迷いはしなかった。

「準備はいい？」

「もううん！」

もうなにも悩む必要はない。ただ、今自分に出来る」とをする。田の前にいる観客たちに、最高のライブを見せつける。

「ワシの書いた小説では、主人公たちは最後まで暴力を避け、歌の力で難を退けた。プロ入りを自ら拒んでまでな。だが、ヨキ。お前さんみたいなやり方も時には必要かの」

「うつせえぞ、ジジイ。……ん？ 誰だ？ あそこで『コンコンやってるヤツ……』

体育館の裏に、何者かがいる。しかし、影になつていてよく見えない。

「誰だ？」

夜季がその方へ行こうとした時

「うつ！ ぐう……かはつ……がふつ！」

「ジジイ！？」

”じい”は激しくせき込んだ。ただのせきではない。医術に覚えのない人間でも「ひどい」とわかるような音だ。

「おいつ大丈夫かよ！」

夜季が慌てて”じい”的体を抱きとめる。

「熱……スゲーぞ、おい。アンタやっぱり病院行つた方がいいって！ ちつとも平氣じやねーだろ！」

「くつ……なに、すぐに治まるわ……。そんなことより、早う連れ
て行つてくれ」

「でも……」

”じい”は、夜季の顔を見据えた。顔面蒼白なのに、その瞳だけ
は力強く輝いている。

「頼む。全て終われば、大人しく病院に行つてやる」

この深い瞳に囚われると、なぜだか反論できなくなる。

「くそつ、絶対だからな！ 最後まで見たら、すぐに救急車呼ぶからな！」

「おう、頼む……」

一方、映画の方はクライマックスの直前ここまで来ていた。

「こよこよだね～。ミオちゃん」

「はい。頑張ります」

「あの、スーパーをさ……」

控え室。離子、壬織、凛、そして夕紫がいる。

「僕はこいつまでこの格好でいなきやなうないの？」

凛はまだ女物の衣装を着せられたままだ。

「こーじゅん、似合つてんだから。……あとで写真撮つて女の子たち
ひき売りつけよ」

「何？ 今なにか言つた？」

「んーん。なんにも

「……その格好なら男にも売れる」

「ちよっと、コース今まで何言つてるのー？」

笑いが起き、緊張がほぐれる。

「それにしても、ヨキはどう行つたのかなあ

「セツネさんと会ったけど、大学生の人たちも見てないって。
たぶん……」

一同の脳裏に、暮越のことが思い浮かぶ。

それを振り払つよひ、明るく雛子が言った。

「ヨキなら大丈夫でしょー。アイツならたぶん、なんか……なんか
してくれそう」

曖昧な支持だ。

「とにかく、あとは『』のライブさえ成功させれば映画は完成なんだ
からー。ミオちゃん、任せたよー。」

「は、はーー。」

根拠はないが、雛子が言つと本当にどうにかなりそうな気がする。
そして、録画した部分が終了に近付き、壬穂は舞台袖に待機する。

(あと10秒……)

予定では、録画の再生が終わると同時に舞台ライトが当たり、
前奏にあわせて「シグミ」役の壬穂が登場することになっていた。

(6……5……4)

音響や照明の担当者も、その時を待つた。

(3……え?)

ブツン。鈍い音を立て、映像が途切れた。予定よりわずかに早い。
おかしい。正常な再生の終わり方ではない。一方、音響や照明を担当していた者たちも、異変を感じていた。機械が動かないのだ。

「……ブレーカー」

まつ先に原因を悟ったのは夕紫だった。

「どうして……リハーサルでは上手くいったのに……」

凛が不思議に思つて言つ。

不穏な空氣を感じたのか、観客席の方からもザワついた声が聞こえだす。

「ふ、ブレーカーってどこのあんの？」

雛子が慌てて声を上げる。

「スーコ先輩、私、音楽なしで出た方がいいですか？」

「あ……で、でも、明かりもなにもないんじゃ……」

突然のハプニングで混乱に陥つてしまつている。その時、体育館の扉が開く音が控え室にも届いた。そして、聞きなれた声が。

「『真夜中の草原に、魂の籠つた歌声が響く。遠く失われたものを取り返そうとするように、その歌はどこまでも響き渡つた。時代も

空間も越えて、遠く、高く『……ど、ひひでワシの小説は終わつてゐる』

「じい……じい！？」

雛子は控え室を出た。入口の扉が開け放され、暗幕で閉め切った闇の中に日光が差し込む。その光の中に立っているのは、紛れもなく畠倉浪才　“じい”だった。

「じい……なんで……」

“じい”はステージに向けて歩き出しながらも、言葉を続ける。

「初めまして。鶴鳩高校の生徒諸君。ワシが……この映画の原作者、畠倉浪才だ」

ええっ！？　マジ？　と、会場がざよめぐ。

「暗幕を開けて！　それから先生にマイクを！」

凜の指示で一斉に暗幕が開けられ、室内に光が降り注ぐ。

「音楽家は音楽に。絵描きは絵に。己の人生、生き様、思想を込め、それを見た人々に自分の思いを伝える。……そして、小説家は文章で表現する。その点では小説を書くという行為は芸術活動だと言える」

ステージの上で電池式のマイクを手渡され、畠倉浪才の演説が始まった。

「やつた。ライブはダメになつたけど、先生が来てくれたおかげで助かった」

凛が安堵した声を出す。壬織や夕紫も、気持ちは同じだった。

ただ、雛子だけが表情を重くしていた。

「じい……じいじい」

誰に言つともなく、言葉が口から洩れる。

「どうして……」「」

「スー」「セ々？」

「ゴメン、リン。あたし、ちょっと外に出てる」

そして雛子は控え室を通りて外に出た。

「なにやつてんだ。木崎」

「さ、君は……ヨキ、君?」

夜季は“じい”を体育館に送つた後、すぐに先ほどの人物を追つていた。

その人物は木崎だつた。その手に、ペンチのような工具が握られている。

「それで何を切つたんだ?」

「い、これは……」

「言つてやひうか。電気の配線だひつ。……暮越の命令か?」

暮越の名が出た途端、木崎の顔に汗が浮かぶ。

「ち、違う。……僕が、か、彼の指示に失敗したから、……か、勝手に……」

今にも泣き出しそうな声だ。

「安心しろ。先生」

夜季は出来るだけ、穏やかに言つた。

「もひアイツはあんたのことを憎まない。あんたも、アイツの『機嫌をとらなくていいい』

「え? ど、どうこひ」と?

それには答えず、夜季は控え室へ向かつた。

第25章・我慢からの解放

会場は一時混乱したものの、どうやら”じい”の機転で難を脱した。予定とは大きく変わってしまったとは言え、原作者由らの登場と公演はどぎきりのサプライズとして功を奏したようだ。

「…………つたくあのジジイ、最後におこしここ持つていきやがって」

夜季は木崎と別れ、暮越との決着がついたことを知らせる為に控え室に向かった。

「あつ弔キ…………どつしたの！？ その傷…………」

凛が夜季の顔中についたアザや切り傷を見つけ、心配そうに尋ねる。

「俺は大丈夫だ。つかお前の方……そいつまで女装してんだよ

「これは…………その、スーパーさんが…………」

その離子は控え室にいな。

「あいつ、どこ行った？」

「ああ。あいつと外に出る、って言つてたけど

「…………そつか。すれ違になつたかな」

夜季は雛子に話したいことがあった。“じい”の容態についてである。

「ワソ。暮越のこと……終わったさ」

「え？」

「説明すんのは面倒だが……とつあえず、あいつはもう俺たちを邪魔しない。今の停電も、暮越のせいじゃない」

それだけ言って、夜季は外に出た。

(スーコ、ビニにいるんだ?)

思い当たる場所は2か所あつた。

「スー！じやねえな」

生徒会室にはいない。そして、もう一か所に向かつ。

屋上だ。

「じい……なんで……」

雛子は転落防止のフェンスにもたれかかり、体育館を見下ろしていた。耳を澄ますと、マイクで拡大された声がここまで聞こえてくる。

「なんで……」

「スー！」

「「ひむやつー？」」

突然声をかけられ、雛子は飛び上った。

「三、三キ？ なにしてんの、いんなど……」

お前こそなにやつてるんだ。そう言つて返したかったが、夜季は報告を始めた。

「暮越のことは解決した。あいつはもひ問題ない」

「わつ……つて、三キ、ボロボロだよー？ ケンカしたの？」

「俺は大丈夫だ。……俺は」

その言葉の二コアンスで、雛子は夜季の言つたことを悟った。

「…………？」

「スー！」あのジジイ、相當ヤバイぞ。今こいつしてしゃべってんのが奇蹟的なんざらいな

夜季は体育館の方を顎で示す。

「あれは風邪をこじらせたなんてもんじゃない。もつと前から……
そうだ、前にお前の家で晩飯食つたとき、アイツ薬飲んでたよな。
あの頃からすでに悪かつたんじゃねーか？」

「……」

雛子は何も言わずに背を向ける。

構わず、夜季は続ける。

「どうなんだ、スーコ。ジジイはいつから……」

「…………いやん。別ん……」

「…………スーコ？」

「別んいーとー ヲキ、はよ帰つてー。」

雛子の肩が震えている。怒ったような声だ。

「な…………いわけないだろー！？」

「いーかい、出でつてー！」

違う。怒りの声ではない。悲しみをこじれた声だ。

「はよ、はよ出てー……」

「スーコー。」

夜季は、後ろから雛子の両肩をつかんだ。その手に押し殺した震えが伝わる。

「頼む……教えてくれ。俺もジジイのことが心配なんだ。頼む……」

おもわず、肩をつかんだ両手に力が入る。

風が吹き抜ける。木の葉の触れあう音と、”じい”のマイクの声だけが聞こえる。長い沈黙のなか、よつやく雛子が口を動かした。

「3か月前……9月の頭にはもつ……」

「9月……？」

夜季はハツとした。初めて夜季と”じい”が出会ったのはその頃だ。

「じゃあ、あの時にはすでに……」

「ちゃんと病院で調べたわけじゃないと。知り合いの元お医者さんに簡単に診断してもらつただけやつちやけん、本当は……とつぐに入院しちょりんといかんつて……」

バカな。夜季は思つた。あの、常に人を小馬鹿にしたような笑顔の裏に病魔が蔓延つていたとは……。

「な、なんで早く病院に連れて行かなかつたんだ！」

「連れていいひとした！」

雛子は、のびの奥から絞り出すよつて言葉を続ける。

「連れてこうとしたけん……じい、嫌やつて……。じいが嫌て言つたら逆らえんもん」

それは夜季も同じだった。なぜだかあの男には、人を従わせる無言の力がある。

「そんで、しばらくは大丈夫そつやつたちやけん、この間かい急に悪くなつて……」

(……待てよ?)

夜季はあることに気付いた。

(「いつも……スーコはジジイの体がヤバイってことを知つてて、今まで明るく振舞つてたのか? 3ヶ月も前から? ）

口には出さなかつたが、離子にはその考えが伝わつたようだ。

「じい、ずっと平氣なふりしちよつたもん……。自分で自分の体が悪いってこつはわかつちょっとん、元氣なふりばして……。心配すんなつて、言うたもん」

「……」

「周りが暗いとよけい体に悪いつて。ウチが明るく元氣なほじ、じいも元氣になれるつて言つたもん……」

一重の衝撃だ。我慢していたのは”じい”だけではない。離子もまた、必死に悲しみを抑えていたのだ。

「お前……」

「やかい……。やかい、ウチは泣いたらいかん……。ウチが泣いたら、じいが悲しむ……」

そうだったのだ。離子は、表情が豊かで感情が素直に出ているよう見える。しかし、「泣く」という感情の表現だけは絶対にしなかつた。楽器が壊された時も、決して涙は見せなかつた。

(スーアー……)

”じい”的には限界が近づいている。それなのに、今、当の本人が無理に体を押して壇上に立つてゐる。

なんのために? 離子の映画を完成させるために。

「うそ、だろ? ?」

夜季は改めて体育館を見る。そこから聞こえてくる声は、離子の映画を台無しにしないがためのものだ。

そしてその事実が、離子の我慢にも限界をもたらした。

(スーアーは……ijiに泣きに来たんだ! -)

両手に伝わる震えが、ますます大きくなる。ほとんど自分に言い聞かせるように、離子はつぶやいている。

「泣いたらいかん、泣いたらいかん……ウチの泣き顔見たら、じいが悲しむ……」

「……いいや。もつ

夜季の手が、震える肩から離れた。そしてその腕で雛子の顔を覆い隠し、白い頭を自分の胸に抱きしめた。

「よ、よせ……？」

「もう我慢しなくていい。お前は、もつたくさん我慢した」

夜季は自分の小ささを痛感した。誰よりも強く闘っていたこの少女を、ただの能天氣だと思っていたのだから。そしてその償いとして、今自分に出来ることをした。

「ううすれば、誰にも泣き顔を見せずにすむだらけへ。」

「…………うん」

「今は……泣いていいぞ」

夜季の体温が、雛子の背中に伝わる。それは雛子自身の感情と絡み合って、さらに熱いものとなって込み上げる。

「甘えて、いい……？」

「…………ああ」

温もりは涙となつて、少女の瞳からこぼれた。ただの悲しみではなく、感謝のこもった涙が夜季の傷ついた腕を濡らした。

第26章・月夜に紡ぐストーリー

一か月が経ち、十一月の中旬。

夜季との約束通り、文化祭が終了するとすぐに”じい”は入院した。その病室に、夜季、雛子、凛、夕紫、壬織が見舞いに来ている。

「いい加減、入院生活も飽きたのう」

「頼むから、勝手に抜け出したりすんなよ」

”じい”は相変わらず飄々としている。

「ふん。ワシは退屈になるとなにをしでかすかわからんぞ」

「だから、退屈させないために毎日僕らが来るんです」

凛が笑って答える。

西条兄妹と夕紫は、”じい”的の本當の容貌については知らされていない。ただの風邪だと伝えられている。

「監視つきか。まるで囚人だな」

「そんなことより、じい。映画のビデオ持ってきたよ

雛子がカバンの中からビデオを取り出す。中身は無論、文化祭で公開した映画である。

「おう、そこのビデオデッキに入れといてくれ。……なんだかんだで見るヒマがなかつたからね。今夜ゆっくり見させてもらうわ」

「そーいや俺もまだ見てないんだよなあ……」

夜季が頭をかきながらつぶやく。

文化祭の終了以来、メンバー達は多忙の日々だった。

畠倉浪才の孫だということが知れ渡り、雛子は畠倉浪才のファンに質問攻めを受けるハメになつた。壬織はヒロインとしての名演技が高く評価され、アマチュアの演劇団体から引っ張りだこになつてゐる。凛は、現・生徒会副会長として次期生徒会役員選挙の準備に追われていた。夕紫は受験生たちからの「勉強教えてくれ」という依頼に応えるのに忙しい。

しかし、最も多忙を極めたのは、夜季である。

「スッゴイよね~。ヨキって、プロの人に認められたんだって」

映画の一般観客の一人に、たまたまプロの絵描きがいたのだ。そして、その人物が夜季の描いた絵に感銘を受けて絶賛した。

「なんか、卒業したら弟子入りしないかとか言われてよ……」

「ほう。そりゃ大したものだな。受けるんか?」

「わかんねえ。突然ソなこと言われてもなあ……」

それはそうだろう。いきなり弟子入りなど言われても現実感がわ

かなくて当然だ。

「やうそろ面会終了時刻だね」

凛が時計を見て言ひ。

「また明日来るからね、じい。ちゃんと元気になつて早く退院して、クリスマス楽しもうね」

「ふうむ……ワシやあクリスマスチャンではないが、賑やかなのは結構だ。いつそのこと病室でドンチャン騒ぎするか?」

「……アンタは迷惑つづ一言葉を知らんのか?」

「はて、耳慣れん言葉だな」

ハハハ……と笑いながら、一同は病院を出た。

そしてその日の夜、"じい"は病室を抜け出した。

「……そうだ。今すぐ来い」

公衆電話で、ある人物を呼び出す。場所は、初めて夜季と"じい"が出会った公園だ。

「よい月だ……」

街灯が必要ないほど、月明かりが周囲を照らしていた。九州南部

とほこえ、真夜中の十一月は寒い。吐く息が白く凍る。

「「」こんな日には、熱燗で一杯やりたいところだな。盃に注がれた酒に、月を映しながら飲むのが上手いんだが……それももう飲めそうにないの?」

「……なにやつてんだ。アンタ」

”じい”の座っているベンチの後ろから、声がかかる。呼びだされた人物 夜季が到着したようだ。

「来たか。三キ」

「「」こんな時間に何の用だ？ あれほど三回たのに抜け出しあがつて

夜季もベンチに並んで座る。

「もつと怒られるかと思ったが、意外に冷静だな。三キ」

「アンタはなにを言つても言つだけ無駄だからな。……でも

「でも？」

「これだけは言わせてくれ。……マジで死ぬぞ、アンタ。こんなことじてたが」

夜季の表情は暗い。言つても無駄。でも言わなければならぬことだ。

「ああ。わかつとる。上げなこつしよつたら、直にワシシャあ死ぬ。

やけん……ほんの少し早^はくなるだけだ。予定よかな

その言葉で、夜季の中の疑惑が確信に変わった。そしてそれを“じい”自身が裏付けた。

「どつちみち、ワシの体はとっくに手遅れだ。」お前さんに初めて会^おうた時にやあ、もう死期を悟^つとつた

(やつぱり)

夜季は改めてとなりに座つてゐる老人を見やる。「この男の無言の迫力は、”死”を受け入れた人間のそれだつたのだ。

「病院に行くのを断つたのは、どうあがいても助からんと確信したからだ。それならば、残つた時間を自由に過ごしたいと考えてな」

「……当然、スーコも知つてたんだな」

「……ああ。ハツキリとは伝えんかつたが、なんとなくワシの死期が近いことは察しとつたようだ。……スーコはスーコなりに、色々気遣つてくれたようだな」

「……」

なんとも、奇妙な光景だ。今しゃべつてゐる老人は、間違いなく死に瀕している。それにも関わらず、その顔に苦痛や悩みの影はない。むしろ、その瞳は生き生きと輝いているようにも見える。

そのせいだらうか。夜季も、この老人を無理やり病院に連れ戻そうという気持ちになれなかつた。本来なら、声を枯らしても「生

きり、「命をあきらめるな」と叫びたいところである。しかし、それをさせない力が、”じい”にはあった。

「三キ」

血の氣の薄い唇が動き、低い声がゆるりと這い出て来る。

「今夜お前さんを呼びだしたのは、どうしても話しておきたい物語があるからだ」

「物語？」

「ああ。ワシ……朝浦義朗の人生を描いたストーリーだ

宇宙の果てまで見渡せそうなほど澄み切った星空のもと、ポツリ、ポツリと、”じい”の昔話が始まった。

第27章・孤狼の生涯（前編）

畠倉浪才こと朝浦義朗 通称”じい”の破天荒な性格は両親から受け継いだものである。

第2次世界大戦の際、彼の父親は兵士として徴収された。だが、その男は争いを嫌い、戦場を離脱した。そして身分を隠しながら様々な国を放浪し、最終的に敵国であるアメリカの領土に定住した。

「じゃ、じゃあ……アンタがハーフだってのは……」

「スーコから聞いたか。その通り、ワシの母親はアメリカの娘だった」

その娘も、戦争が嫌いだつた。一人がどのようにして出会い、恋に落ちたのか。それは非常に興味のあることだが、残念ながら”じい”も詳しいことは知らなかつた。

戦争が終わりに近づいたころ、一人は日本に渡つた。戦時中の混乱を巧みに利用して戸籍をでっち上げ、日本人同士として結婚した。

「ムチャクチャなことすんなあ……」

「朝浦家の血筋だな」

しかし、戸籍上は問題なくとも、一目見ればその娘が日本人でないことはすぐにわかつてしまう。当時のアメリカは敵国。当然、見つかればただではすまない。娘は重病患者と偽つて決して表に出ず、ひつそりと生活していた。

「よほどワシの父親に惚れとつたんだろうなあ。でなければ、異国
の地で引きこもり生活など到底できはしまい」

やがて、子どもが産まれた。忌わしい子どもが。

「常識破りの両親からば、常識破りの子どもが産まれた。生まれつ
き白髪の赤ん坊がな」

さすがの両親も我が子の白髪には驚いた。異国間の血のなせる技
なのか、正体を隠し続けることによる精神的なストレスが遺伝した
のか、原因はわからない。しかし、産婆を呼ぶこともできず苦労し
て産んだ子どもだ。どんな形容であれ、それは一人の愛の結晶に変
わりない。

「そしてワシは両親からの愛情を受けながら育つた。親のいない子
どもが多かつた当時としては恵まれた方だ」

だが、優しく接してくれるのは両親だけであった。一步外に出れば、周囲の人間からの反応は「気持ち悪い」である。幼いうちは頭
に布を被せて誤魔化してきたが、自分の足で自由に歩き始めるよう
になるともうお手上げである。親が目を話した隙に表へ飛び出し、
その白髪頭をさらけ出してしまった。

「ワシが10歳のころ、母が本当の病気にかかつて死んだ。その出来事さえも、周囲の人間達は『悪魔に呪われた』として認識したよ
うだった。……唯一の救いは、母が異國の人間だと最後までバレな
れた。

「ワシが10歳のころ、母が本当の病気にかかつて死んだ。その出来事さえも、周囲の人間達は『悪魔に呪われた』として認識したよ
うだった。……唯一の救いは、母が異國の人間だと最後までバレな
れた。

かつたことだな

その後、少年を待ち受けていたのは受難の日々だった。父親が出稼ぎに行っている間、少年はずつと一人だった。外に出れば、大人たちは眉をひそめて自分を避ける。子ども達は石を投げつけてくる。自然、家の中にいることが多くなる。

かつて母が素性を隠して生活していた部屋。そこにはたくさんの本があった。それらの本を一日中読みふけることが少年の趣味であり生きがいになった。

やがて少年も成長し、自分で働くよになつた。相変わらずどこに行つても嫌われ続けていたが、工場の作業員として真面目に働いた。そこで得た賃金を「ソソソソ」と貯金し、ある額まで稼ぐと少年は旅行に出かけた。

「別にどこか目的があつたわけじゃない。ただ……ひょっとしたら、どこかに自分を受け入れてくれる場所があるかもしれない。そんな拙い希望を抱いての旅だった」

帽子で隠そうともせず、あえて白髪をさらしたまま九州に向かった。だが、旅先でも彼への好奇と嫌惡の視線は絶えなかつた。道を歩けばそこらじゅうの人間が彼に注目し、負の感情を持つ。

その旅の途中、父が事故死したという報せが入つた。そして少年は確信した。

「自分は、もう誰からも愛されない　とな」

「……」

夜季は老人の顔を見る。その顔に刻まれたしわの深さが、そのまま「じい」の男の人生の深い影を象徴しているように思えた。

“じい”の話はなおも続く。

「だが、この魅月町を訪れたとき、ワシの人生は変わった」

夏空の下、少年は魅月町の農道を歩いていた。その日は天気がよく、気持ちを軽くするために散歩していたのだ。

すると、前を歩いていた少女がサイフを落とし、気付かずに去ろうとした。少年はサイフを拾い声をかけようとしたが、思いどもつた。

「突然白髪の男に声をかけられては、その少女が氣の毒だと思つてな……」

だが、勇気を出して声を掛けた。サイフを押し付けすぐに逃げ去ろうと思いつながら。

『あの、サイフ落しましたよ』

声に気付き、少女は振り返った。その顔を見たとき、少年は思わず息をのんだ。

こんな田舎町の人間だとは思えないほど白く透き通るような肌、形のよい脣。少し長めの黒髪からは、品のある香りが漂つてくる。それだけに、田元を覆う白い包帯が際立つた。

『ありがとう』『ごま』ます。……私、田が見えないので、申し訳ありませんが手渡していただけますか?』

そう言って盲田の少女は手を差し出した。サイフを渡すとき、わずかに一人の手が触れあつた。

『もしよろしければ、お礼にお茶をさせてください』

「それが、後のワシの女房 ツグミだ」

「! ? ツグミって……アンタの小説のヒロインの名前じゃねえか

「やうだ。……あの話自体、ワシの体験をアレンジしたものだ」

少年にとって、ツグミは初めての友だつた。盲田がゆえに、白髪のことと嫌われることもなかつた。むしろ逆に少年の方から「自分は白髪のせいで魔だと言われている」と話すと、真剣な顔でこう答えた。

『あなたが魔だなんて信じられないわ。だって……とても優しい声をしているもの』

一人はたちまち仲良くなつた。ツグミは幼い時の事故で視力を失い、今もリハビリを続けてはいると言つた。そんなツグミに、義朗は色々な話を聞かせた。

「ワシはガキのころから本ばかり読んでおつたからな。その本の内容を覚えている限り言つて聞かせた。時には自分自身の感想や考察を交えてな」

成人すると同時に正式に魅月町に住所を移した。それからも毎日二人は出会い、話をした。そんなある日、ツグミは提案した。

『ギロウの話はとても面白いね。……ねえ、いつそのこと、自分で本を書いてみたら?』

半ば遊びだつたが、こぞペンを取つてみるとサラサラと手が動いた。膨大な読書量と考察、そしてツグミに話して聞かせる行為が、そのまま物書きとしての修行になつていたのかもしれない。

「試しに一作出してみたら、予想以上の反響だつた。それを報告する」と同時にワシはツグミにプロポーズした

そして、小説家・唾倉浪才としての道が開けたのであった。

第28章・孤狼の生涯（後編）

義朗とツグミの夫婦は、周囲からすればかなり奇妙な組み合わせに見えたことだろう。白髪の男と黒田の女。しかし、周りが何と言おうと二人は幸せだった。

「子どもの頃から、ワシの話を聞いてくれる人間はあらんかった。近付くだけで皆ワシのこと避けた。だからかもしれません。文章を通して人々と触れ合つことが、自分の天職のように思えた」

月日は流れ、やがて二人は子どもを授かつた。ツグミによく似た、黒髪の女の子だった。

「ワシはとにかく嬉しかった。一番心配しておった、白髪の遺伝がなかつたのだからな。なにからなにまで女房にそっくりの可愛い娘で、本当に良かった……」

産まれた娘はすくすくと育ち、一人前の立派な大人になった。そしてその娘もまた恋愛をし、隣のS市に嫁いでいった。

「」の頃になると、義朗夫妻への周囲からの風当たりも穏やかになっていた。年を重ねる」といに、白髪の頭も目立たなくなつていった。

「そして17年前……」

「スーコが産まれたんだな」

「そう、3月3日産まれ。だから離子と名付けた。その日は雪が降つておつてなあ……魅月町では真冬に降ることさえ珍しいというの

「」

「……」まで話した”じい”はふーっと息を吐く。

「ワキ。その時のワシの心境がわかるか？孫が産まれたのは嬉しい。だが、その孫はワシの忌わしい部分を受け継いでしまっていた

「隔世遺伝の白髪……か」

もしかしたら、白髪のせいでの子も周りから疎外されるようになってしまふかもしだれない。そんな恐怖を感じた義朗と娘夫婦を救つたのは、またもツグミだった。

『泣き声がとても元気ね。この子、とても強い子に育つかもしれない。この魅月町に雪を降らせたんだもの……』

「その言葉でワシは決意を固めた。ワシと離子の大きな違い……それは、守ってくれる人間がいることだ。ワシの母はすぐに病死してしまった。父は出稼ぎで滅多に家にいなかつた。……離子は違う。あれの両親は共働きをしとつたが、ワシとツグミがおつた」

昼間、両親が仕事に行っている間は義朗夫妻が孫の面倒を見た。少年のように家に閉じこもらせるのではなく、積極的に外に連れて出ることによつて、早い時期から白髪の少女の存在を周囲に知らしめた。その甲斐あつて、白髪を受け入れやすい環境が出来た。

「道理で、スーゴがアンタになつくわけだよ」

「ワシの娘は当時からバリバリのエリート会社員だったからのう、簡単に産休が取れんかったんだ」

”じい”は空を見上げる。キラリ、と流れ星が光った。

「スーゴがあんな性格になつたのは、ワシがそいつさせたからだ。どんな時でも、なにがあつても、くじけずに笑つて前に進む。そつすればイジメられることも少なかろうと思つてな」

「……立派な教育だな」

実際、雛子はあきらめなかつた。もつとも、その裏で悲しみを押し殺していたのだが……。

「皮肉か？ ヨキ。……そして8年前、ツグミが肺を患つて入院した」

入院したツグミを担当したのは、駆け出しの若い医師だった。そしてその医師は、患者のツグミよりも義朗と雛子の白髪に興味を持つた。なんどもじつこく検査を勧め、データを取つて研究しようとしたのだ。

「そいつは悪氣があつたわけではないのだろうが、大事な女房が入院しとる夫に対してもあまりに無神経な態度だった。……もつとも、ちゃんとツグミの治療もしてくれとるようだつたが」

「……？ もしかして、アンタが病院嫌いなのはそのせいか？」

「まあ、一部はやうだな。それだけではないが」

ツグミが入院してしばらく経つたある日。

ご家族の方だけ、ちょっと。そんなドラマみたいな台詞を現実に聞かれるハメになつた。

ツグミは、すでに末期のガンだつた。元々あまり丈夫な体でなかつたこともあり、余命は数か月と宣告された。当然そのことはツグミには秘密にしていたが、自分の死期のことは本能的に理解していだようだつた。

『私、もつ長くないのね』

見舞う度にそう言われ、「そんなことはない」と反論するのが口課になつてしまつた。

『結局、田は治らなかつたわね……。一度でいいから、あなたの顔を見たかつたのに』

そう言いながら夫の顔を触る。

『ばあちゃん……』

9歳の雛子が心配そうに祖母の手を握る。

『スーちゃん、じいをよろしくね。スーちゃんは町に雪を降らせた子。元気で、強い女の子になつてね……』

雛子が親元を離れ、”じい”と一人暮らしを始めたのはツグミの死後だつた。

「女房に先立たれ、ワシは悲しみの底に落ちた。スーコがいたおかげで、どうにか持ちこたえていたが……」

「……」

夜季は痛ましい思いに包まれた。自分の住むこの町で、そんなことが起っていたことは想像もしていなかった。

「さあ、ここで話は現代に戻つてくる。3か月前、ここでお前さんと会つた前の週のことだ」

「……判明したんだる。アンタの病氣」

3か月前。夜季にとつては何年も前のことのように感じられる。

「そうだ。ついにワシにもお迎えが来たかと觀念したが……ふと、気付いた」

自分には、家族以外に親友と呼べる者がいない。仕事上の付き合いはあっても、心の底から友情を感じられる存在がない。妻を亡くし、自分も死のうとしている間際にそのことに気付いたのだ。

「ワシの青春は引きこもりの生活だつたからな。唯一、ツグミと知り合つたころがそれしかつたが、相変わらず他の人間はワシのことを避けとつた。ワシには友達がおらん……」

そう、つぶやいた言葉を雛子が聞いていた。

「そしてスー！」は言つた。『あたしがじいに友達作つてあげる。そんで、一緒に色んなことして遊んだり助け合つたりするの』……とな。そして連れてきたのがお前たちだ』

「つーじゃあ……」

「やべ。今回の映画の企画せよこから出発した。……ワシは青春を味わつてもらおうと、スーパーなりに考えたことだ」

『だから……映画、作るの手伝つて?』

『ウチの学校、文化祭まで地味で詰まんないんだもん。あたし達の手で盛り上げなきやー。』

『じーの小説を映画にしたらおもしろいだらうなーって思つててさ』

それ、言葉は、全て。

「ワシのため。ワシの死に際を青春で彩るために……」

時計の針が、十一時を回った。

第29章・聞きたかった言葉

二つの間にか、月が雲に隠れていた。明かりが薄れると一層寒さが増したように感じる。

「スーコ……あいつ……」

「あれの言ひ」とはちいとメチャクチャなところがあるが、かえつて功を奏したな。お前さん達と出合えて、ワシは楽しかった。だが……」

「だが？」

「最後の最後、肝心なところでワシはしぶじったな。妙な胸騒ぎを感じて無理に学校に出向き、お前さんと暮越の闘いにいらん茶々を入れた」

あの卓球部室に”じい”が訪れた理由。それは「虫の知らせ」というものだったらしい。

「その後の講演もだ。勝手に気を利かせて、逆にスーコに心配をかけてしまった」

「……気付いてたのか？　アイツが……」

「泣いたそつだな。ヨキ。お前さんの腕の中で」

「……」

夜季がそのことを思い出して顔を赤くする。

「ワシが余計なことをしたばかりに、若いもんに迷惑がかかつた。
……所詮、年寄りが若者の世界に入れるのは無理だつたようだな
」

（あ？）

夜季の顔色が、今度は少し青ざめた。

「失敗だ。ワシに青春など、とても叶うものではない……」

（なんだ、なにを言つてんだ？　このジジイ）

「失敗」その言葉が重く圧し掛かった。

（なんだよ、おい。スーコがあれだけ我慢したつてのに、失敗だ
？）

熱い感情が、込み上げてくる。

「誰が言つた事か忘れたが……”人は生きてきたようにしか死ねん
”らしい。ワシは孤独のまま死ぬ」

「フザけんなっ！」

夜季は叫び、立ち上がった。

「アンタ……スーコの努力を踏みにじる気か！？　無駄だつて言つ
のか！？」

得体の知れない想いが心中を荒れ狂う。怒りなのか、悲しみなのか、その顔は苦痛に歪んだ。

「青春はムリだとか…… 友情はないだとか…… ジャあ俺たちはどうなんだよ！？ 僕は…… 僕はダチじゃねえのか！？」

「……」

「アンタがどう思つてゐるのか知らねえが、俺は楽しかつたぞ！ 初めはムカついたけど、アンタと一緒にいて楽しかつたつ！ リンやゴーシだつて、きつとそうだつ！ それを…… それを…… つ！」

ギリリ…… と、歯を食いしばる。

「友達じゃないってのか！？ 僕たちは！ 一度や一度しくじつたぐらいで、あっさり消えちまつぼくど安いもんだったつーのかつ！？ 僕たちはアンタのために映画を作つて、アンタも俺たちのために病氣の体を押してきた。一緒に笑つて悩んで…… それが……」

”じい”の肩をつかみ、真正面から声を浴びせる。

「青春つてもんじゃねえのかよつ！ ジジイ！」

ひとしきり叫んだ後、夜季は顔を伏せて息を整える。じばりくして顔を上げると、”じい”は空を見上げていた。

「月が…… 出たなあ」

夜季も思わず空を見る。雲の端から月の光が漏れだしていた。

「フ……フハハ」

「？ ジジイ？」

「フハ……ハハハ……ハハハハッ！ そうか、そうかヨキ！」

「な、なんだよ、急に……」

”じい”は高らかに笑う。

「ハハハッ。そうか、ワシらは友達か。ワシは青春を謡歌できたつちゅうわけか！」

「あ、ああ……」

「フハハ……それが聞きたかった。その言葉をお前さんに言わせるために、しみつたれた格言まで用いたのだ」

「なあっ！？ い、今の演技かよ！？ おいつ！」

夜季は驚いて”じい”的肩から手を放す。

「そうか、ダチか。フフフ」

「てめえ、ここのジジイ……。恥ずかしいこと叫ばせんな！」

「ハハ、ハハハハッ！」

笑い声は夜空に昇り、月明かりと共に町中に響いた。

散々笑つた後、”じい”は病院に戻ることにした。

「あ～あ……なにが悲しゅうて男の背中に抱きつことかこやならんのだ」

「うひせえよ。病人が勝手に出歩くからだ」

夜季は”じい”を連れて病院まで歩いてくる。

「四キ。わたくしはどいつもからうたら女子がよからう」

「…………あ？」

「スーゲセビウだ？」

「何の話だよ」

クッククック……と”じい”は小さく笑う。

「ズバリ、言つがの。お前をんスーゲのじとをビヂんと思つちよるんだ？」

「ど、どうして……」

しばらぐ沈黙して歩き、曖昧な口調で話しだす。

「別に、その……。やかましいとか、よく笑つな、とか」

「その笑顔がステキだなあとか」

「そこまでは言つてない」

「言わんだけだろ？」「

またもや呟き笑いをする。夜季は表情だけ不機嫌にしてそのまま歩を進める。

「素直じゃないの？ 逆にスー口の方はわかりやすい。あれはお前さんのこと……」「……」

「うーるーせーえ」

強引に言葉を遮る。

「クツクツク……。ワシとしあやあ、知らん男に持つてかれるよりも安心出来る。ただし」「

「ただし？」

「まだツバは付けるなよ？ せめて一十歳になるまではおあずけだ」はたち

「だから何の話なんだよ」

「ハハハッ！ 熱い、顔が熱いぞお？ ヨキ」

二人は病院前の長い坂を登つて行く。その坂の上に、二人は予想外のものを見た。

「ヨキ！ 瞳倉先生！」

「なつ……リン！？」

凛だけではない。夕紫、壬織、有田、そして雛子に暮越までもが一人を待ち受けていた。

「ほら、大集合だな。なぜわかつた？」

「ユーシが気付いたんです。先生の病状がとても重い」と、そして今夜あたり病院を抜け出すかもしれないってことに」

凛がそう言つと、”じい”は夕紫の方を見た。

「フ……。ユーシ、お前さんもつづづく大した奴だな」

「そんなことより、じい……」

雛子が厚手の上着をもつて進み出る。

「寒くない？ これ、着て」

「おう。スマンなあ」

”じい”は夜季の頭を軽く小突きながら上着を受け取る。

「ジイさん……」

次に声をかけたのは、暮越だった。

「……すまねえ。アンタは、アンタはただ本を書いただけなのに……勝手に恨んで……」

「……」

「オレ……オレ、頭下げて謝った。楽器壊された連中に。それでアンタにも謝りたくて……。本当に、すまねえ」

暮越は頭を下げる。

「いいい」とよ

「いいんだよ。暮越。あれはこのジジイが勝手に出張つたせいだ」

夜季がそう言つと、暮越の表情がいくぶん和らいだよつだ。

「わたくし……こんな道端で話すのもなんだな。とりあえず病室に戻るとするか」

「歩くのは俺だけどな」

夜季がそう返すが、笑つたのは”じい”だけだった。

第30章・「おやゆみ」

「まつたぐ、」この病院はセキュリティがなつとらうの。出のものが入るのも簡単すぎるわ」

「そりゃ普通勝手に出ねえからな。病人は

「夜季は病室のベッドに”じい”を寝かせる。

「ふーっ。よしやく落ち着いたわい。……さてさて、お前ら今からなこをすむつもりだ？」

同じく忍び込んで来た一同を見渡す。

「じい……」「メン。あたし、みんなこしゃべつひやつた。じいの体調のこと……」

「僕たちの方から問い合わせたんですね。どうしても心配で……

凛の表情は暗い。壬穂や有田もだ。

「なに、構わんさ。むしろ今は心配してくれて嬉しいんだ

”じい”が死んで言つた時、低い声が聞こえた。

「あと、どのくらいだ？」

もう言つたのは、夕紫だった。

「ユーリー、心のままにして……」

離子が聞き返すが、夕紫は答えない。

「……フフ。ワシが答えるでも薄々感じておらう。」

“じい”はかすかに笑つ。

「もへ、まもなくだな。明日の朝口も持めやしない」

「お、おこじじい！」

「じいっ……？」

夜季と離子が同時に声を上げる。

「じーつ。静かにしかたにや見つかるわ」

「どのくらうつて……またか」

「ん？ ワシの寿命のことかと思つたが、^{ちう}違つうついたか？ ユー

シ

夕紫は答えない。

「じい、ダメだよんな」といつわ。ちゃんと廻院して、クリスマス楽しもつて言つたのに……。そんなこといつわダメ……

……

「スー！」

”じい”はベッドの横に座り込んだ雛子の頭をなでる。

「ワシは楽しかったぞ。この3か月、生涯のつちでもっとも充実した日々だった。スーケやヨキ達のおかげでな。……もうこれ以上、何も望むことはない」

「そんな……じい……」

「ワシが話したいことは、全てヨキに伝えた。あとはもう……」

「畠倉先生っ！」

凛が言葉を遮る。

「なに言つてんスか！」

「先生……」

有田、壬織、も声をかける。

「じいさん、俺はまだ、アンタに償いきれて……」

暮越もだ。

「やう言われてもな。今更どうもならん」
「やう

「ジジイっ！」

「じいー！」

ベッドの周りを若者たちが囮む。"じい"は一人一人の顔を見ながら口を開く。

「……3か月前まで、想像もしどらんかった。ワシの死に際にこれ程の人間が集まってくれるとはの」

その声にはすでに霸気がなかつた。舞台に幕を下ろすような、そんな声だった。

「人は生きていれば必ずいつか死ぬ。そして生きている者は、その人間の死を越えて生きねばならん。……人の命は重い。だが、大勢で背負えば負担は減る」

雛子の頭に置いた手を、すつと引いて布団の中に戻す。

「ワシの人生はマイナスから始まった。なにをしたわけでもなく、髪が白いというだけで虐げられてきた。それでも、どんな苦境でも、あきらめずに前を目指せばいつかはプラスになる。日陰に落ちた種でも、花を咲かせるることは出来るのだ」

すすり泣く声がする。壬織だ。

「今、ワシは親友たちに囮まれている。人並み以上の幸福のなかにいる。……このまま眠ることが出来れば、これに勝るものはない」

「じい……」

「実感があるんだ。次に目を閉じれば、一度と目覚めんという実感がな。」

”じい”の瞳が、孫を見据える。

「スー！」お前は一人じゃない。ワシがいなくなつても、リンやコーシ、マモルや壬穂がある。これからは暮越とも仲良く出来る。そして……」

「……俺がいる。後は任せら」

夜季は静かに、けれども力強く囁つた。

「フフ……そうだな。三キ。全では……お前さんと話したぞ」

「……ああ。……ねやすみ、ジジイ」

「三キー!？」

雛子が驚いて顔を上げる。

「なに言つてんのー? 三キー!」

すると、今度は夕紫が口を開いた。

「……おやすみ」

「ユーシー!？」

思わず声が大きくなる。

「……ククク。おやすみ、か。さよなら、よりはありがたいな。

……ほれ、残りのもんも賣つたへれるか?」

「じこつー。」

沈黙の後、有田が、続いて暮越が言った。

「おやすみなせー。」

「おやすみ……じこさん」

そして、凛がすすり泣く壬織の肩に手を置き、別れの言葉を促す。

「おやすみなせー。……畠倉先生」

「おや、すみ……なせ、い……」

「コソン……//オチャケン……」

残るは雛子一人となつた。

「スー……」

「イヤつー。」

雛子は、じこ の腕にすがり、頭を伏せる。

「いやや……。じこ、死なんですよ……。ウチ、ウチ、じこがねらう
と……つー。」

「スー!。ワシがいなくなるんはイヤか?」

「いやに決まつちよんやん！」

「わづか……。わかつた」

”じい”はわざと明るく口調を変えた。

「それじゃあ、ワシはどこにも行かん。体はのうなつても、ずっと
スーコの近くにある」

「ウチの、近く……？」

「わづだ。約束する。ワシはいつまでもスーコを見守つてやる。だ
から……」

一ヤリと笑つてみせる。

「今は……眠らせりくら。ちいと疲れたわ」

そう言われても、離子はベッドに顔を伏せたままだ。

「スーコ」

その背に、夜季が手を触れた。そして離子の耳元に口を近づけ、
一人にしか聞こえないよつにつぶやく。

「ジジイは、お前に笑つていてほしいんだぞ」

「あつ……」

雛子は顔をあげ、”じい”を見る。田が合つた”じい”は微笑んだ。

それを見て、雛子もまた、静かに笑みを浮かべた。同時に、少しだけの涙も。

「約束、だからね。じい」

「ああ」

「それじゃ……」

ゆっくりと、その言葉を放つ。

「……おやすみなさい。じい」

老人の田にも、かすかに光るものがあった。

「おひ。おやすみ……」

そして朝浦義朗は田を開いた。その田は、雪は降らなかつた

第31章・日の降る町

唾倉浪才の死から1か月。一時期は報道陣が駆け付けて賑わつた町も、ようやく落ち着きを取り戻しつつあった。

夕方、黒いジャンパーに身を包んだ男が山道を歩いている。唾倉浪才の墓に向かうためだ。その場所は魅月町と隣町の境にあり、東を見ると魅月町の街並みが、西の空を見ると夕日が見える。もっとも、今は空を厚い雲が遮っている。

男が目的の場所に辿り着く。すると、真新しい墓のまえに誰かがいた。見慣れた白い髪、そして同じく真っ白のコートを着た少女が。

「あ、ヨキ」

「スーコ。来てたのかよ……。お前、まだあの家に住んでんのか?」

「うん。ウチにとつては、”じい”と一緒に暮らした家の方が実家みたいなもんだしね」

「……親はなにも言わねえのか?」

男 夜季は脇に抱えた長方形の箱を下ろす。

「なに、それ」

「……手ぶらで來るのもなんだと思つてよ。かといって花なんてこのジジイには似合わねえし、どうせなら俺にしか出来ないものを持ってきた」

箱を開け、布で包まれた平べったい長方形のものを取り出す。夜季がその布を外すと、雛子が感嘆の声をもらした。

「うわあ……スゴい。それヨキが描いたの？」

「おー。これ描くのにひと月もかかっちゃった」

草原の中に立つ銀の毛色をした狼の絵。その瞳は穏やかで、周りには蝶が飛んでいる。

「俺なりに、アンタのことを絵にしてみたんだけどよ。アンタが気に入らなくても一応、ここに置いておくぞ」

夜季は額に入った絵を墓前に供えながら、そここ“じい”がいるかのよみづに話しかける。

「……それと、一つ朗報だ。暮越の弟が元気になつたつてよ。この間暮越が実家に戻つて顔見せたら、すぐによくなつたんだとか」

つい先田のニュースを報告する。

そう言って、夜季は身震いする。かなり冷え込んできたようだ。

「寒くなつてきたねえ……あつ」

雛子の声に反応して空を見る。

「おー?」

「わ～スゴい～ 雪だつ～」

魅月町には珍しい、ハツキリとした雪が降つてきた。

「スゴい、スゴい～ ほり、ヨウヒ～」

「ナビもかよお前は……」

夜季は呆れるように言つて、再び体を震わせる。

「寒い？ ヨウヒ？」

「……少しな」

その答えを聞くと同時に、雛子は夜季の胸に飛び込んだ。

「お、おこひ、スゴイ……」

「んん……」

胸板に頭をこすりつける。その白い髪に、静かに雪が溶け込んでいく。

「ねえ、ヨウヒ。……結局、プロの画家さんに弟子入りするって話、どうなつたの？」

「……色々考えたんだけどよ。取ける」とした。卒業したら即修行の旅に連れてってくれるんだってよ」

「旅？ ヨウヒが遠く行くの？」

「ああ……。日本の色々なところを巡って、色々な景色を描かせるらしい」

「へえ……。行っちゃうんだあ……ヨキモ……遠くに

少し、悲しそうな声だった。しかし、このことは雛子自身も覚悟していたことだった。

雛子が夜季の背中に腕をまわし、抱きしめようとした時

「あつ！　おい、スーコー！　あれ見ろっ！」

突然雛子を突き放し、夜季は西の空を指さした。

厚い灰色の雲が、天への道を開くかのよつとバックリと割れ、そこから赤く燃える塊が顔をのぞかせた。

「あれ、夕日？　わつ後ろ、町の方も見て！」

雲の裂け目から差し込んでくる陽光が、舞い降りてくる雪をオレンジ色に染め上げる。雪と太陽。相反する二つの気象が重なり、光の粒が町中に降り注いだ。

「キレイ……」

「スゲホ。あり得んのかよ、こんなこと……」

夕焼けは一人をも紅く包んだ。

幻想的な景色の中、雛子は夜季の腕のすそをつかむ。

「ロマンティック……てやつだよね。これ」

「ああ

「そんじゅ……」

雛子は背伸びをし、出来るだけ顔を近づける。

「ちっしゃねうかな……」のチャンスに

微笑む唇から、言葉が発せられる。

「ウチ……ミキのこと好き……」

互いの息遣いが聞こえるほど静かな空間で、その言葉は夜季の耳に届いた。

「ひ……」

「ウチは、好き……。ねえ、ミキは……？」

雛子は口を閉じ、今度はしっかりと夜季の体を抱きしめる。その髪も、ほんのりとオレンジ色に輝いている。

鳥の声すら聞こえない、静かな世界だった。夜季も黙つて雛子の体を抱きしめた。

一人の肩に雪が積もりかけた時、夜季が口を開いた。

「俺は……」

「俺は？」

雛子が胸に顔をうずめたまま聞き返す。

「俺は……その……描きたい」

「描く？」

「今の、『』の景色を描きたい」

夜季の田は、紅い雪の降る魅田町を捉えていた。

「……ウチへの返事は？」

「……あとで、だ」

「ちゅうと、あとでつてな『』？」

雛子が怒った顔で夜季を見るが、それより一瞬早く夜季は体を放していった。

「『』の景色を忘れねー内に、早く描きたいんだよー。」

そう言しながら夜季は空箱を拾い、走って山道を下つて行く。

「『』ひあ～つ！ 反事するの誤魔化すなあ～！」

雛子もその後を追つて走る。

「せつかくウチが告白したんだから」の場で返事しろー。」

「あのジジイの側でそんなこと出来るか！ 絵が出来てからだつ！」

一人は笑いながら斜面を駆け下りて行く。すぐに雛子が追いつき、腕をからめながらも一人は走り続けた。

「下り切った時、夜季はさつきまでいたところを見上げて心に誓つた。

（俺は俺のやり方で、こいつを幸せにしてやる。だから、アンタはもう休んでいい。それと）

最後の一言だけ、口に出す。

「ありがとうな。ジジイ」

それを聞いた雛子も真似をする。

「ありがと。じい。キレイだつたよ……」

雲の割れ目がゆづくと細くなつていき、やがて完全に閉じた。

誰もいなくなつた墓に、白い雪が降り積もる。その墓前に飾られた絵の中では、狼が笑っているかのように見えた。

狼は、決して一匹ではなかつた

第31章・口の鋸る町（後書き）

こんにちは。徳山ノガタです。

長かった【雪】も、次回でいよいよ最終回です。どうか最後までお付き合いください。

Hピローグ・魅月町に桜咲く

春。桜の舞う校門前で、雛子、夕紫、壬織が待機している。

「先輩、卒業おめでとうござります」

「ありがとうございます。現・生徒会長!」

「いえ、その……大声で言つていただかなくとも……」

その時、校舎の方から逃げるように走つてくる人影があった。

「ゴメン、ゴメン、遅くなつて」

「遅いよーリン。……アハハ、ボタンビーンか学ラン!」ととられて
る

「髪の毛も何本か抜かれたよ。おまわりだとか言つて」

……モテる男は大変だな。

「ヨキはまだ?」

「うん。そろそろ来るつて言つてたけど……あつ来たつ!」

雛子が目的の人物を見つけて目を輝かせる。

「お~いっ! ヨキ~! はーやーくー!」

「……うつせえな……大声で呼ぶなよ」

周りにいた生徒が一人を微笑ましそうに見ている。

「おっ、ちゃんと第2ボタン残ってるね。いただきつ！」

「うあつ！？ ちょっと待て！ イキナリ引っ張るなー……つておいで、リン！ 勝手に先行くなあ！」

残りの3人はさつわと歩きだしている。

「以前にまして親密ですね。お一方」

「冬休みの間になにがあつたんだうね……。ちなみに、壬織は誰かと付き合つたりしないの？」

「なつ！？ ……わ、私は別に、まだそんな気持ちはありません。兄さんこそ……」

「壬織の場合、後輩の子を相手にすると似合つと思わない？ ゴーシン」

「……かもな」

「伊波先輩まで！」

その後ろから、一人が追いかけてくる。

「おーい、待てっつってんだろー！」

「フツフーン。第2ボタンゲット！」

ヒラリ、桜の花びらが雛子の肩に落ちる。この日、雛子は一つの大変なものを持ち手に入れた。一つは学校の卒業証書。そしてもう一つは……。

「スー！」出来たぞ、この間の雪の絵

「ホント…？　あ、じゃあ……ついでに返事も、ね？」

「さあて、そんじや俺は早く家に帰つて旅の支度しねえとな

わざと棒読みして誤魔化す。

「なによお、今すぐ言つてよーーー！」

「……人が多いだらうが」

「言えーーー。今すぐ『好き』って……」

「つるせえーー！」

再び、周囲からクスクスと笑い声が聞こえる。夜季は照れて顔を赤くし、怒ったように早足になる。雛子もそれに続き、前を歩く3人と合流して、また笑つた。

「今日はパーティーをお祝いだね！　卒業祝い兼・古名川（いながわ）夜季画伯のデビュー記念！」

「まだ画伯じやねえつつの

若人たちは歩いてゆく。各自の未来へ。背負つた傷は涙で流し、笑顔を咲かせて未来へと……。

その翌日、夜季は町を出て行きました。あやつがおらんと楽しみが半減してしまつところに……。まあ、その活躍はこの町についてよく耳にするがの。

……ん？ ついつい昔のしゃべり方になつてしまつたるなあ。ついでにもう少しじだけこのまま話させてもらひつかの。

フフフ。ワシは約束したからなあ、スーコと。「いつまでも見守つてやる」とな。だから、今こいつして語る事が出来るのだ。……「魅月町」としてな。

そう、ワシ 朝浦義朗は、この魅月町そのものになつた。町中のいたるところで起つていてる様々な出来事を見聞きし、語ることが出来るようになつたのだ。ついでにちょいとばかし口調も変えてみたんだが……やっぱり、ワシはこの話し方が性に合つうるようだな。

さて、ここで物語は5年後、すなわち現在に戻つてくる。

「ほひ、壬纖。急いで」

「兄さん、そんなに早く行つても電車はいつも通りの時間にしか来ませんよ?」

西条姉妹 ではなく兄妹が駅に向かつて歩いて行く。兄の凛は大学院の1年、妹の壬織は大学4年になっていた。

「あ、コーシー！」

駅前のロータリで、ある人物を発見する。夕紫だ。

「久しぶり。……コーシだけ？ スーコさんは？」

凛が尋ねると、夕紫は黙つて駅に入つて行く。

離子は、すでに駅のホームに来ていた。

「スーコさん、久しぶり」

凛が声をかけるや否や……。

「きやー！ ミオちゃん、ますますキレイになつてるー！ なんかオトナのオントナっぽくなつてるー！」

「やつ……ちよ、ちよっとスーコ先輩……！？」

壬織に飛びかかつて激しく抱きつく。……まつたく、変わつたらんなあ、コイツは。

「ねね、電車、まだかな？」

ひとしきり再開の儀式を堪能した後、離子が尋ねる。

「まだだよ。あと3分」

「うへ、早くこ～い！」

遙か北の方を向いて叫ぶ。周りに他の人間がいないのが幸いだ。

なぜ、5年ぶりにこのメンバーが再開したのか。言つまでもなく、あの男の到着を迎えるためである。

「この間、個展見に行つたよ。旅先で描いた絵を集めて個展が開けるなんて、本当にスゴイ才能を持つてたんだね」

「才能つていえば、ミオちゃんさあ。来年東京の劇団に所属するって本当?」

「はい。大学でも演劇を続けていたおかげで」

そう話していると、ジリリリ……と警報がなつてアナウンスが流れる。

「うわあ……もうすぐ、もうすぐつー！」

離子はプレゼントの包みを開ける子どものように喜びと楽しみの表情になる。

ガタタン、ガタタン……と、遠くに電車の影が見える。そう思つた次の瞬間には電車はホームに入つてきていた。

「魅月町へ、魅月町です。お降りの際は……」

車掌のアナウンスを同時に電車が止まり、ドアが開く。

ガラガラに空いた電車の中に、一人の男が立っている。

「……ただいま」

絵描きとしての修行の旅を終え、魅月町に帰ってきた夜季だ。

「ヨキ、 おかえり」

「……おかえり」

「おかえりなさい、 古名川先輩」

と、3人が次々に声をかける中、雛子だけが下を向いて黙つていた。

「スー口……？ どうした？」

夜季が電車から降りようとした時 。

「おつかれりい！ ヨキい！」

「うおつ！？」

雛子は思いつきり、夜季の体に飛び込んだ。急激な体当たりに驚いた夜季はバランスを崩し、雛子もろとも電車の床に倒れた。

「いつてえ…… イキナリなにしやがんだ！」

「えへへ。おかえり、ヨキ」

雛子の方が上に乗る形で倒れたまま、一人は言い合ひ。すると、突然電車のドアが閉まつた。

「あ……」

「よ、ヨキー？ スーロさん！」

凛が慌てて二人を呼ぶが、電車はゆっくりと動き出してしまつた。

「ど……どーしてくれんだよ、おい！ せつか帰つてきたのにまた離れていくじゃねーか！」

「フフン。……みんなよりも先ん、夜季と一人つきりになりたかつたつちやもん」

雛子は床に倒れた夜季の顔を横から挟むように両手で持つ。

「……次の駅で降りるからな」

「うん。そんじゃその前に……」

雛子は目を閉じ、顔を近づける。

誰もいない電車のなかで、二人の唇が触れ……触れ……。

合つ直前に、電車は魅月町から隣町へ出て行つてしまつた。「魅月町」となつたワシ……私は、この町を出て行くことはできないのだ。ホッとしたような残念なような、複雑な気分だ。

まあ、若い一人の場を年よりが覗き見してはいかんからな。……
せいぜい、今のうちに楽しんでおれ。フン。

さてさて、ここだ、今回の物語を締めくくるとしよう。それにしても……今回はちこつと長く話しあけたから少し疲れたわ。夜季も帰ってきたことだし、しばらくの間「語り」は休むとしようかのう。

また、ワシの気が向いたら、この魅月町の物語を紹介しよう。では、ここで二つのセリフ。

……私の名前は魅月町。また、余つ口まで。『じあせとよ』。

ハローゲ・魅月町に桜咲く（後書き）

作中で魅月町が述べたとおり、この「魅月町シリーズ」は今作で完結とさせていただきます。（気が向いたらまた書くかもしませんが、今のところ予定にはないです）

ここまでお付き合いくださった方々、本当にありがとうございました。では、徳山でした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5145d/>

魅月町・懐古の雪

2010年10月8日22時57分発行